

茨城県行方市
杉平貝塚
発掘調査報告書

2007年12月

行 行 方 方 市 市 教 遺 育 跡 委 調 員 查 会 会

序

行方市は、茨城県の東南部に位置し、平成17年9月2日に麻生町・北浦町・玉造町の三町が合併して誕生しました。人口約4万人、面積は、166・33km²になります。東は北浦、西は霞ヶ浦(西浦)の大きな湖に面しています。

地形的には東西の湖岸部分は低地、内陸部は標高30m前後の丘陵台地「行方台地」により形成されており低地は水田、台地は畑地として利用されています。霞ヶ浦沿岸部は概ねなだらかなで連続的な稜線が見られるのに対し北浦側は屈曲、出入りが見られ比較的の起伏に富んでいます。温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、古くより人々の生活の痕跡としての貝塚や古墳・城跡などの遺跡が数多く点在しております。

この度、行方市杉平51-2番地周辺で市道(麻)2229号線道路改良工事が計画されました。計画地内には平成5年の分布調査時に確認された杉平貝塚が所在しているため、県教育庁文化課と協議、確認調査を実施いたしました。確認調査の結果、貝塚本体は道路範囲には及ばず、旧道に散在している貝類の回収作業を行なう事になりました。

散在していた貝類を回収し、確認のためトレンチを設定調査したところ新設計両道路の下層部分に多量の土器の出土が認められた。文化課と協議の結果、市道として削平されるため発掘調査による記録保存をすることになりました。

今回の調査の結果、縄文時代中期の土器が多量に出土し、余り明確でなかった本地域の生活環境などを知ることが出来、大きな成果が得られました。本報告書にまとめられましたことに厚く感謝申し上げます。

本報告書作成に際し、発掘調査並びに報告書の執筆を担当頂きました関係各位に対し心より敬意を表し、この報告書が郷土を、より深く知る上で、広く一般の方々に活用いただければ幸いと存じます。

最後に、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課はじめ、地元関係者各位のご理解とご協力に対し深く感謝の意を表するとともに、調査に携わっていただいた方々に心からお礼を申し上げます。

平成19年10月

行方市教育委員会
行方市遺跡調査会会长
教育長 平山 一己

例　　言

- 1 本報告書は茨城県行方市杉平52-2番地他に所在する杉平貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、行方市が計画した市道(麻)2229号線道路改良工事に伴う記録保存の発掘調査で、対象面積は100m²である。
- 3 調査は行方市遺跡調査会が茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施した。
- 4 調査は平成19年4月13日～7月26日までの期間、合わせて30日間実施した。
- 5 整理作業は平成19年5月1日～9月30日まで行った。
- 6 行方市遺跡調査会組織は下記のとおりである。

会　長	平山　一巳	(行方市教育委員会教育長)
副会長	風間　亨夫	(行方市文化財保護審議会会長)
理　事	茂木　岩夫	(行方市文化財保護審議会副会長)
	植田　敏雄	(行方市文化財保護審議委員)
	羽生　均	(　　〃　　)
	宮内　俊雄	(　　〃　　)
	宮内　利夫	(　　〃　　)
	高野　頭	(　　〃　　)
	吉田　秀邦	(　　〃　　)
	伊勢山雅昭	(　　〃　　)
	宮崎　幸男	(　　〃　　)
	大堀　浩一	(　　〃　　)
	小沼　政雄	(　　〃　　)
	海老原幸雄	(　　〃　　)
	高橋　量光	(　　〃　　)
監　事	本戸　俊文	(　　〃　　)
事務局長	山野　洋治	(生涯学習課課長　　)
	羽生　和弘	(生涯学習課参事　　)
	荒張　文枝	(　　〃　　文化振興G係長)
	深作　幾代	(　　〃　　文化振興G主幹)
	塙　大	(　　〃　　文化振興G主任)
調査担当者	汀　安衛	(鹿行文化研究所)
調査員	徳利　初代	(　　〃　　)

- 7 本報告書の執筆は汀 安衛が行った。
- 8 出土遺物及び図面、写真類は行方市教育委員会が保管する。

凡　　例

- 1 本報告書の縮尺は図中に表示したが、遺物は原則1/3とした。水系レベルは標高を図中に表示した。
- 2 整理作業は主に遺物の水洗いは飯岡忠孝、注記、遺物実測、図面作成、トレース、魚骨は大野和子、貝類遺体、図版作成は主に徳利初代が行い報文執筆、写真は汀 安衛が総括した。
- 3 調査にあたり次の方々にご協力を受けた。記して感謝の意を表したい。
茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会、鹿行教育事務所 斎藤弘道氏

抄 錄

	スギタイラカイヅカハックツチョウサホウコクショ
書 名	杉平貝塚発掘調査報告書
発 行 者	行方市遺跡調査会、行方市教育委員会
所 在 地	行方市山田2564-10
編 集 者	汀 安衛
編 集 機 関	鹿行文化研究所
所 在 地	茨城県鹿嶋市青塚718-1
発行年月日	2007年 12月20日
所収遺跡名	杉平貝塚
所 在 地	行方市字杉平1338-30 他
市町村番号	421
遺 跡 番 号	036
武 井	東経140°30'55" 北緯36°20'30"
調 査 期 間	2007年4月13日~2007年7月26日
調 査 面 積	100m ²
調 査 原 因	道路改良工事に伴う記録保存
時 代	縄文時代前期・中期
主 な 遺 構	確認出来ず
主 な 遺 物	縄文土器・石器・貝類・魚・鳥・獸骨等

目 次

I 遺跡の位置と史的環境	1
II 調査に至る経緯	2
1 調査経緯	2
2 確認調査と調査日誌	2
III 調査の概要	3
1 土器の出土状態	5
① 1区出土土器	5
② 2区出土土器	8
③ 3区出土土器	20
④ 4区出土土器	27
2 土器片錐	27
① 石器、石鏃	27
3 貝塚と貝の遺存状態	31
① 貝類遺体と魚骨遺体	31
② 貝製品	32
③ 魚骨	33
④ 獣骨、鳥、爬虫類、その他	34
IV 結びにかえて	39

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図・貝塚と調査区	1
第 2 図 出土遺物平面図・土層	4
第 3 図 前期、中期の土器	6
第 4 図 1区出土土器実測図	7
第 5 図 2区出土土器実測図	8
第 6 図 2区出土土器実測図	9
第 7 図 2区出土土器実測図	11
第 8 図 2区出土土器実測図	12
第 9 図 2区出土土器実測図	13
第 10 図 2区出土土器実測図	14
第 11 図 2区出土土器実測図	16
第 12 図 2区出土土器実測図	17
第 13 図 2区出土土器実測図	18
第 14 図 2区出土土器実測図	19
第 15 図 2区出土土器実測図	21
第 16 図 2区出土土器実測図	22
第 17 図 3区出土土器実測図	23
第 18 図 3区出土土器実測図	25
第 19 図 3区出土土器実測図	26
第 20 図 3区出土土器実測図	28
第 21 図 3区・4区出土土器実測図	29
第 22 図 各区出土土器片錐実測図	30
第 23 図 各区出土石器実測図	32
第 24 図 各区出土石器実測図	33
第 25 図 石鏃実測図	34
第 26 図 貝刃実測図	35

図 表 目 次

第 1 表 土器片錐	36
第 2 表 1区・2区出土貝類と遺体表	36
第 3 表 1区・2区出土貝類と遺体数と重さ	37
第 4 表 1区・2区出土魚骨、鳥骨、爬虫類骨等	38

図 版 目 次

P L 1 調査前後と貝の状態、貝塚本体の貝層、1区採取後	41
P L 2 1区・2区貝採取、確認トレントと土器・1区の土器出土状態	42
P L 3 2区土器出土状態	43
P L 4 3区土器出土状態	44
P L 5 1区・2区・3区土層、終了後の状態と水田	45
P L 6 1区・2区出土土器	46
P L 7 2区出土土器	47
P L 8 2区出土土器	48
P L 9 2区・3区出土土器	49
P L 10 3区・4区と前期中期出土土器	50
P L 11 各区出土石器	51
P L 12 各区出土土器片錐・石鐵・貝・貝刃	52

I 遺跡の位置と史的環境 (第1図)

本遺跡は、茨城県行方市杉平1035番地他に所在する。遺跡の所在する行方市は茨城県の東南部に位置し、東側を北浦、西側を霞ヶ浦(西浦)に面し、台地中央部に源を発する中小河川によって樹枝状に支谷が解析され凹凸、屈曲の激しい地形を呈している。

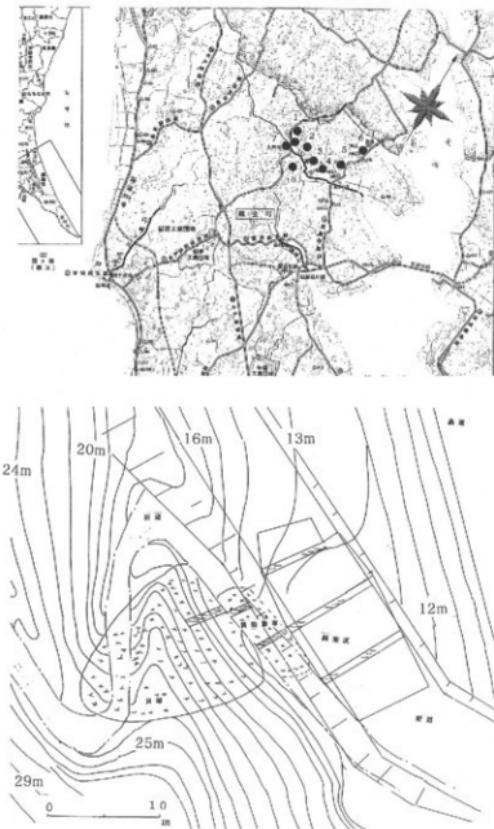
遺跡の大半は、これらの支谷縁辺または半島状、また北浦、西浦に面する舌状台地上、沖積平野などに縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が存在している。西浦や北浦に面する湖岸沖積地は古来より水田として利用されており、こうした恵まれた自然環境の中で縄文時代から近世まで多くの遺跡が存在している。残されている遺跡から、当時の人々の営みを知る事が出来る。

今回調査対象になった杉平貝塚は、地理的には北浦に流れ込む蔵川流域左岸の台地斜面部下位の標高10m程に位置し、周辺には縄文時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が存在している。貝塚の所在する台地直上標高29mには小山遺跡(縄文時代中期、古墳時代)と北西側に上ノ塙遺跡(弥生、古墳時代)の土器が認められ(注1) 東側の小支谷を挟んだ舌状台地に中台(A)遺跡(縄文時代前期の闘山式、弥生式土器)が見られ東側には中台(B)遺跡(縄文時代前期、浮島式)、が見られ更に衛生センター東側には台道上遺跡(弥生、古墳時代)などの遺跡群が見られる。また支谷奥部には古墳時代鬼高二期主体の大集落出津遺跡や中世の小牧館跡、籠田城址なども見られる。

対岸右岸域の大和第二小学校付近は縄文時代の青木台遺跡、役人山遺跡、西側には古墳時代の猪ノ山遺跡、奈良、平安時代の六十塙遺跡も見られ、蔵川両岸域には多くの遺跡が存在している。

杉平貝塚は、1993年に踏査された報告文には黒浜式、五領ヶ台式、阿玉台式土器が報告されている。

注1 麻生町の遺跡 1997年
麻生町教育委員会
編集 茨城大学人文学部
考古学教室



第1図 遺跡位置図・貝塚と調査区

- 杉平貝塚
- 1 小山遺跡 上の塙遺跡
- 2 中台A遺跡
- 3 中台B遺跡
- 4 台道上遺跡
- 5 出津遺跡、小牧館跡
- 6 篠田城址
- 7 青木台遺跡
- 8 役人山遺跡

II 調査に至る経緯

1 調査経緯

平成18年12月、行方市市道(麻)2229号線道路改良工事にかかる埋蔵文化財有無の照会があり、工事予定地には周知の遺跡である杉平貝塚が所在することから平成19年1月に確認調査を実施した。

確認調査は県教育庁文化課の立会いで行い、旧道に散在する貝層は以前（昭和40年代、混入していた瓦、ジュースの空き缶、アイスクリームのビニール袋等から）試掘のものが廃棄されたと考えられた。したがって散在した貝類の採取のみと決定した。

3月22日、23日に市道部分の散在した貝殻の採取の後、貝層の埋め戻しを兼ねて旧道下側の竹林（旧畠地）にトレンチを設定し試掘を行った。その結果、道路予定地内に縄文時代中期の阿玉台式～加曾利E式を主体とする土器の包含層が存在することが判明した。

その後埋蔵文化財の保護と取り扱いについて市建設課と協議を重ねたが、道路位置の変更は困難との結論に至り記録保存のため包含層の発掘調査の手続きを行い、平成19年4月3日より5月2日の予定で調査を開始した。

面積約100平方㍍の発掘調査を実施した。

調査は4月13日より5月24日までと7月22～26日合わせて30日間実施した。

2 確認調査と調査日誌

調査は平成19年2月5日に茨城県教育庁文化課立会いの下で確認調査を行った。その結果貝層は、試掘坑から掻き出された貝殻が以前に利用されていた里道の土に堆積していたことが判明、前述したように縄文時代の生きた貝層ではなかった。

3月 5日 貝層散在範囲と貝塚の測量調査と貝の採取作業。

3月 6日 前日に統いて旧道に散在する貝類の採取。瓦やブロック、空き缶などが認められる。

3月 7日 貝塚本体の試掘部分を掘り一部確認調査を行った。貝類採取作業。

3月 8日 貝類ほぼ終了。下部に阿玉台式を中心とする土器が一部に認められた。

3月 9日 貝類散在部の調査終了。写真撮影、斜面下部に黒褐色土が認められ土器の存在が認められた。発掘調査を前提に表土層が1mあり改めて重機を用い排土、トレンチ2本を設定し包含層の伸び、深さの確認作業を行う。遺物の量と範囲などから改めて工事日程と予算を建設課と協議、発掘調査の届けを提出した。

3月16日 土器を包含する層の伸びを確認するため竹を伐採、重機を用い表土を除去。

3月19日 重機を用い範囲の特定作業。包含層は下部に広がりを見る。終らず明日も行うことになる。

3月20日 約70m²の表土を除去、トレンチを更に掘り下げるため包含層の確認を行う。土層の作図と写真撮影本調査に向けて確認作業を行なった。

4月13日 前日に調査機材、道具の搬入がしてあり、テント設営。4区に区画し調査を開始する。4区砂層確認

4月16日 2・3・4区ともローム層のため遺物少なし。湧水に悩まされながらの作業。降雨の為半日。

4月18日 約15m²前後で下げる。湧水と水溜りのため水田状態に悩まされる。

4月20日 4区遺物実測と取り上げ。2・3区調査。遺物の量多くなる。写真を撮影するため水洗いする。

4月21日 4区調査、3区遺物取り上げ。2区調査、1区東、南に拡幅し調査開始。

4月23日 1区は5層（最下層）から10cm前後の遺物。2区遺物の取り上げ、全体に土器は半円状に分布。

4月24日 2区・3区共に5層の灰褐色の粘土状層に入り足場悪く、湧水、降雨のため調査進まず。

- 4月26日 3区の遺物取り上げ、1区・2区調査。遺物が多量と天候不良で調査進捗状況は遅れ気味。
- 4月27日 1区・2区調査、3区遺物の取り上げ、5層は土器多量。各区とも石器は非常に少ない。
- 4月28日 2区・3区の遺物は重なり、取り上げても、取り上げても出土。雨天続き足場悪く水汲みも仕事。
- 4月30日 遺物は調査区下端に多い。天候不良で午後から遺物取り上げ。2区約半分か。
- 5月 1日 2区遺物の取り上げ。3区底面地山部を確認、やや大きめの遺物あり。
- 5月 2日 1区遺物取り上げ、ほぼ終了。2区・3区調査、擂鉢底状態で土器重なる。
- 5月 3日 3区やや窪みあり調査、遺物取り上げ。1区はほぼ終了。
- 5月 8日 連休、降雨でプール状態。水汲み、3区残部の調査と実測と取り上げ。
- 5月 9日 遺物の広がりが認められ1mほど拡幅、重機で表土除去。3区残部実測取り上げ。
- 5月10日 2区調査、遺物実側取り上げ。拡幅部分遺物多し。
- 5月11日 本日もプール状態。2区実測遺物取り上げ。土層作図、平面図作成。
- 5月12日 拡幅部分の調査。足場悪く調査進まず。
- 5月14日 全般に乾き調査日和、進むが遺物の量は相変わらず多量。
- 5月15日 午後から雷雨のため乾いたのもまた逆戻り。2区調査
- 5月16日 プール状になり水中ポンプで2度汲み上げる。3区残部調査。
- 5月18日 水汲みの後、2区調査、遺物実測取り上げ。足場悪し。
- 5月19日 2区遺物実測、取り上げ。足場悪し。
- 5月21日 2区調査、遺物実測、取り上げ。2区ベルト除去。
- 5月23日 3区ベルト除去。ベルト下調査。実測遺物取り上げ。
- 5月24日 全体の残部確認、調査。平面図、エレベーション、写真撮影。

文化課後藤氏、確認のため来場、本日で調査終了とする。

その後道路敷きの削平、掘削との関係で7月22日から7月25日まで4日間、道路工事を中止し調査を行なった。包含層は下位の排水路まで伸びていると考えられ、末端は水田まで延びていると推定される。

調査期間は4月23日より5月24日までと7月22～25日合わせて30日間になった。

III 調査の概要 (第2図)

調査区は台地斜面部末端に位置する。貝塚は縄文時代中期頃まで本地域に共通性が認められる(注1)斜面貝塚である。北浦に流入する巣川によって解析された舌状台地先端部の北側斜面に位置し、貝塚本体は標高15m付近から24mにかけて東西20m、南北15mの範囲に貝層の存在が認められた。

貝塚末端下端には2カ所の「試掘」したと思われる痕が認められた。その中の一つ北側部分の埋積土を取り除いたところ綺麗なトレンチ痕が認められ、このトレンチから貝層の末端部が明確になり、道路予定地からは貝塚の貝層は外れることが明確になった。

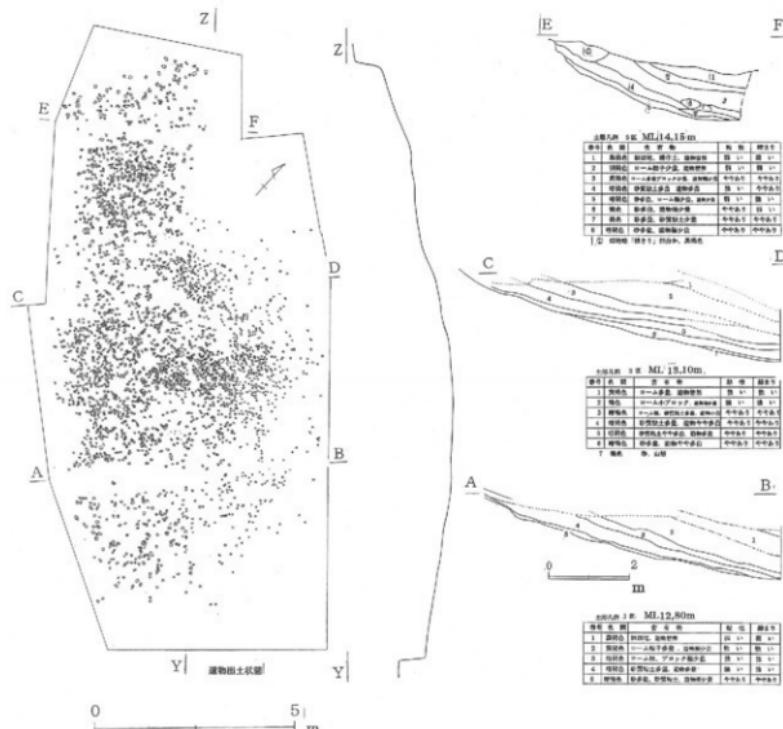
調査は当初、旧道に散在するこの2カ所の「試掘」によって掻き出された貝類の採取作業のみと考えられ、採取作業を行なった。貝類を採取し終えたところで確認のため、貝層下端「旧道端部」の灰褐色層から土器片の出土が確認され、更に下方に延長しトレンチを三本設定し広がり、深さを確認したところ、台地の傾斜にそって水田方向、下部に向かって遺物の包含層が存在することが判明した。旧畠地の黒色表土を除去、更にローム層を排除したところから土器等が認められ、その規模は長さ15m、幅4m、面積約70m²であった。この遺物包含層を調査区とし、4区に細分し調査を行った。

当初の確認調査によって採取された貝類は大半が鹹水産で20種、ハマグリ、カキ、サルボウ類、オキシジミ、魚骨はウナギを始めタイ、エイ、ヒラメなどがみられた。

出土した土器の大半は縄文式土器であり前期の関山式、黒浜期、浮島式、興津式、中期初頭の五領ヶ台式や阿玉台式、加曾利E式などが認められ、中でも主体をなすものは阿玉台式～加曾利E式土器であった。

以下、調査区1区～4区の出土土器、土器片錐、石器、貝類、魚骨等について後述する。

注1 北浦、靈ヶ浦周辺の縄文時代中期頃までの貝塚の大半は斜面部に形成され、中期後半から後期になり台地上の地点貝塚に変化する。大半は住居跡などへの投げ込み的なものが多くなる。



第2図 出土遺物平面図・土層

I 出土土器（第3図～第18図）

本貝層部（搅乱貝層）からは前述したように土器は皆無に近かった。多量の土器が出土した調査区は、これらは全て貝層の存在する下位の斜面部の表土下2メートル乃至2・5メートルの灰褐色の粘土を含む鈍い黒褐色土層の中に存在した。旧地形は第1図に示すように中央部がゆるく窪み擂鉢状を呈する。土器は、この中央部の2区、3区に集中して認められた。層序的には1区では3層、2区では4層と5層の一部、3区では4層及び5層であった。遺物の存在した色調は各区とも共通しているが、包含層の厚みには地形状からの差が見られた。

出土土器は縄文時代前期の関山式、黒浜式、浮島式、興津式も見られたが、主体は阿玉台I式と加曾利E式であった。図面上に点で表したもののは位置とレベルを測定したものである。

以下、各区分に出土土器について述べる。前期と中期初頭の遺物は各区とも少ないと各区一括した。

1 前期と中期初頭の土器（第3図）

第3図1～6は胎土に繊維を含む土器で、1は、口唇部に刻み目を持つ深鉢形土器で口縁は開き褐色、内面は丁重に調整される。関山式。2～6は胎土に繊維を多量に含む深鉢で半截竹管による平行沈線、条痕が見られ、4はループ状の沈線が巡り、5は縄文のみの脣部。5は半截竹管による継位沈線の上に格子状のモチーフを持つ。

8、9、10、11、12は半截竹管による平行沈線、円形刺突文が見られる浮島式I式。13は口唇部が肥厚し半截竹管による爪形が施されるII式。14は半截竹管による平行沈線文、器肉の薄い繊維を含む土器でI式か。15は貝殻波状文を持つ。色調は暗褐色、褐色。平縁の深鉢。16、17、24は内面に輪積み痕を残す無文土器で浮島式に伴うもの。

18～20は興津式で口唇部に刻み目を施し変形爪形文、口唇部断面三角形で尖る19、20と半截竹管文を脣部に配する18が見られる。口縁部が開く深鉢。暗褐色、黒褐色。

① 中期初頭の土器（第3図）

21、22は平行沈線と三角刺突文を持つ五領ヶ台II式で21は口縁部、器肉は薄く丁重な調整。23は縄文地に有節沈線による波状、人型状モチーフを持つ。24は無文、25地文に平行沈線、26は指頭圧痕、27は口唇部に沈線、28は幅広な無文帯をもつ。23～28は加曾利E式に伴うもの。包含層からの前期遺物の出土割合は、全体の5%以下と非常に少なかった。

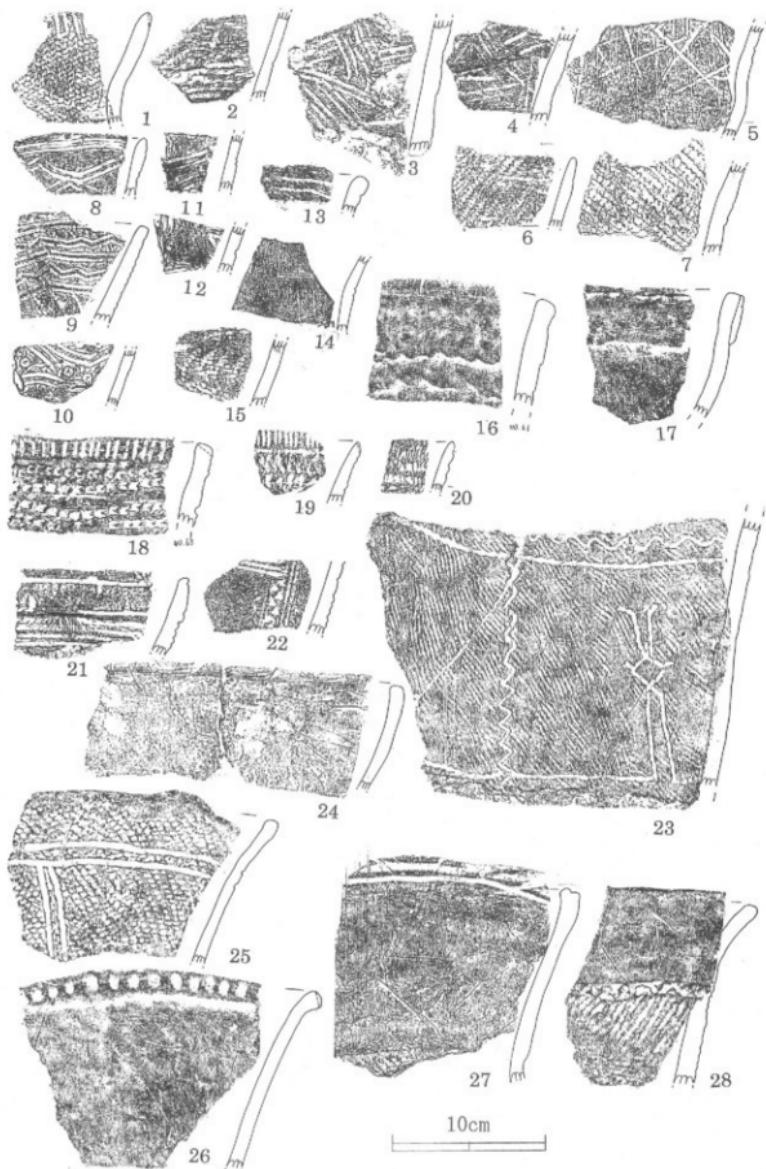
2 1区

本区からは大小約500片の土器が出土した。出土した土器の中には底部が穿孔された鉢形土器第4図8や10のような大形のものも見られたが、大半は破片で器形をうかがえるものは僅かである。

① 1区（第4図）

第4図1～4、8は阿玉台式土器で、器形は口縁部を弱く内湾させて開き、一列の角押文を施す平縁で2、3は波状を呈し胎土に砂と少量の雲母を含む。器肉は7～9mmで薄くいずれも小型の深鉢形土器。1、2、3は阿玉台Ib式。8は器高15cm、口径25cmの浅鉢で口縁は平縁、脣部中央部が三角形状に張り出し、底部径は10cmと縮まり穿孔されている完形土器。隆帯による梢円区画を連続させ、これに沿って角押文を配し内側に弧線状などに竹管刺突を米粒状に施す。脣下部は粗雑なナデ調整で無文、色調は鈍い赤褐色、胎土に少量の雲母、長石を含む。4は大形の浅鉢形土器で、器形は頸部で大きく外反して丁重な調整がなされ無文。胎土に雲母、細石を含み焼成は良い。4はIII式。5、6はIV式。

5は口唇部が外反肥厚、脣部は縄文を施す円筒形、平縁の器形で少量の雲母と砂を含む。9は平縁で小型の深鉢形土器。口縁部は弱く内湾し口唇部は三角形状に尖る。押し引き沈線、山形文



第3図 前期、中期の土器



第4図 1区出土土器実測図

を配し細石をやや多く含む。6, 7, 10は加曾利E式土器では本遺跡唯一の深鉢形土器突起部で細い粘土紐を突起頂部に「耳状、楕円、円形状」に貼付、頸部では2段の隆帯に刻みを施す。1, 12, 13は底部。

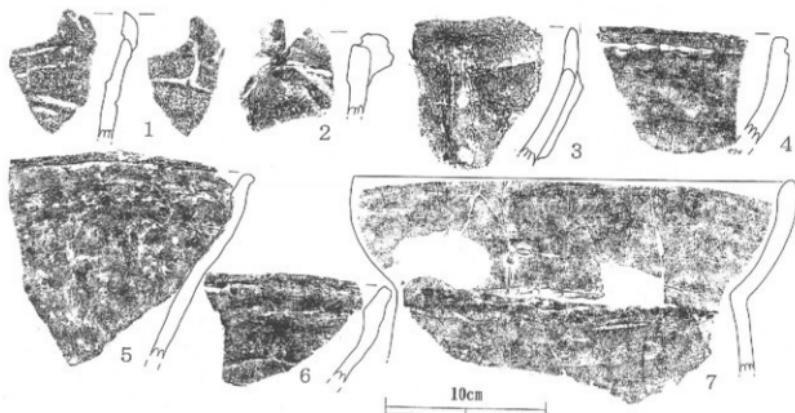
② 2区 (第5図～第16図)

本区は、調査区のなかでも擂鉢状の底の部分に当たり出土土器は最も多量で約4500片の出土を見た。したがって本区出土の土器が包含層の主体を占めると考え、168片を第4図～第16図に示した。完形品は無く、いずれも破片で器形のうかがえる大形のものが多認められた。時期は阿玉台式II～IV、加曾利E式が主体を占め、勝坂式、大木式、中峰式土器も見られたが、数量は少なかった。

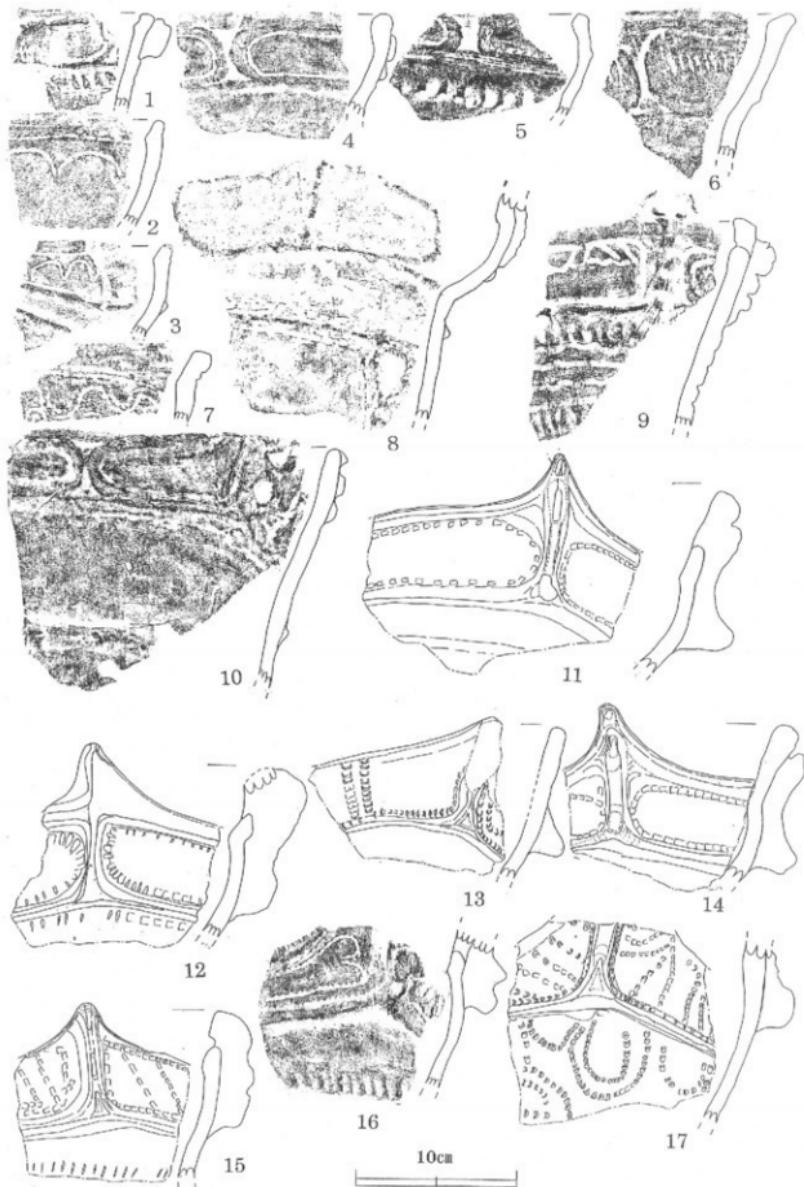
器形は口縁部が平縁のもの、扇状または波状突起を持つもの、中間的な弱い波状を呈するものに大別され、大半が深鉢形土器である。器形は、口縁部内側には顕著な稜をもち、内湾気味のものと直立、または外反するものがある。胴部は円筒状で、弱く外反し底部に至る深鉢が主であった。文様は、隆帯による楕円形や三角形状に区画され、(逆T字状)これに沿って一列、または複列の角押文を押捺するもの、沈線を一列または複列、有節沈線の押引き沈線、隆帯貼付による区画を複列連続させるものが見られる。出土土器の口縁部は大半が波状、または山形状を呈し、平縁は非常に少なく一割以下であった。

第5図1～7は弱い波状部に突起を付けたもの。1、2は小型の扇状突起を貼付し、有節沈線を口縁部に二列施文する。3は扇状、4は平縁で有節沈線を口縁部に沿って施文。5、6は内側に稜をもち内外に調整痕を残し、器肉は薄い。口縁部が外反し頸部が縮まる大形の深鉢形の7が見られる。いずれも数量的には少なく1の内側に肉彫り的な三叉文をもつ土器は一片のみ。3は2片であった。7も1片のみ、阿玉台Ib式。

第6図1は平縁の口縁部に楕円区画に沿って角押文を配し、小型で脆弱な追上がり部分に玉抱き、胴部には刻み、下位に細かな角押文を配する。小型で器肉の薄い土器で、雲母の混入は少なく、色調は暗褐色、雲母を微量含む阿玉台Ib式。4は器形がやや大形であるが1同様で隆帯区画の楕円に沿って有節沈線文を一列配する。5も1同様でやや大形の角押文と楕円区画に沿った角押文と刻みを持つ。口縁部はやや内傾気味。2、3、6～17は楕円区画に沿って角押文又は有節沈線文を一列配する。楕円区画内にはハート状、アナグラ属貝殻文、竹管押引きなどの組み合わせにより文様を充填する。



第5図 2区出土土器実測図



第6図 2区出土土器実測図

9は有節沈線文、15、16は脣部にアナダラ属貝散文を施文、16は口唇部に刻みを持つ。

隆帯が迫上がり突起状で刻み目を施す5、11と指頭押圧を加える6、7、8、9、10、11、15がある。脣部は無文が多く地文としてRL、またはLRの繩文を施す。阿玉台II式。胎土は1、4、8を除いて雲母をやや多く含む。色調は鈍い橙褐色、または暗褐色を呈する。

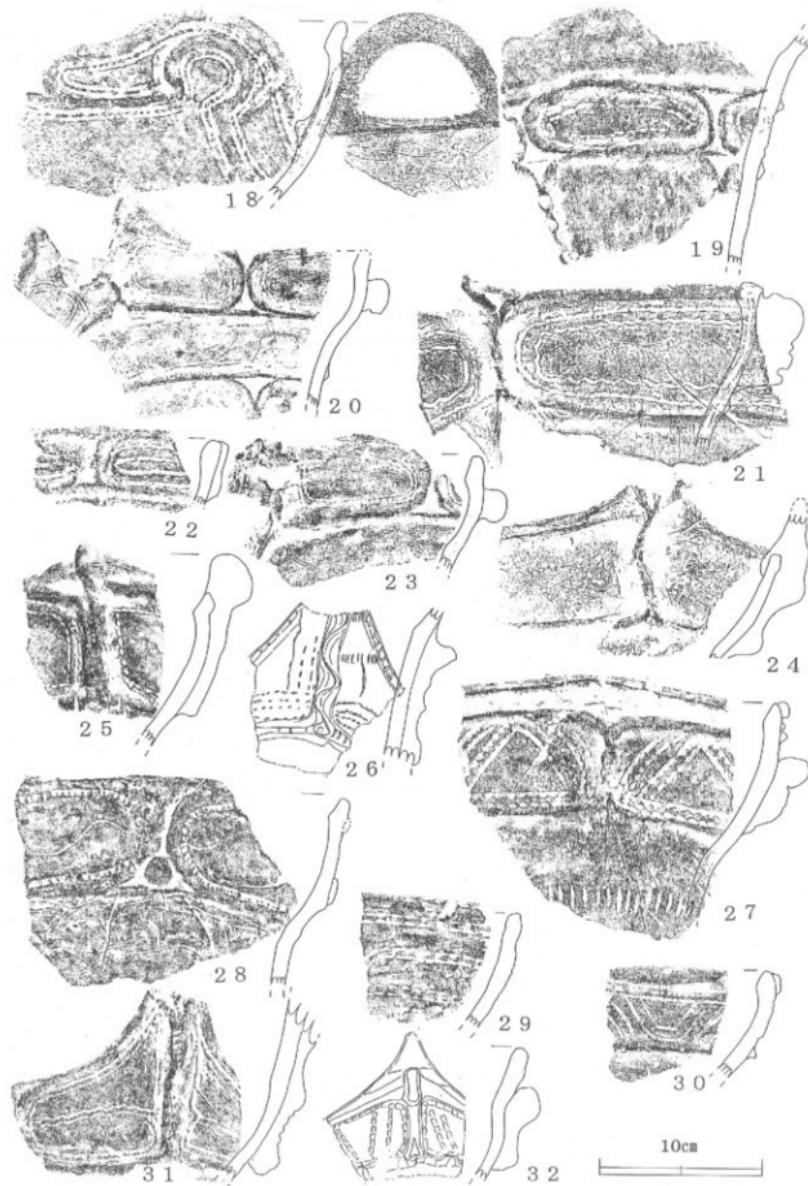
第7図18～32は梢円区画内に半截竹管による有節沈線、結節文を複列配するもので30は沈線、器形は、口縁部が外反する。内側の稜は弱いものと直線的で無いものも見られ、器形は深鉢形土器が大半で、口縁部が波状または波頂部に突起を持つ。文様は隆帯による梢円区画文を持つものと三角形状に分けられ、波頂部から垂下する隆帯が「く」の字状を呈する24、26と押圧を加える19、26と刻みを入れる21、27、31と梢円区画の間に円形を抱く28なども見られ角押文と脣部に平行沈線文が施されるもので類例はない。波頂部が山形状を呈する26、31、32があり26は口唇部に刻みを持つ。梢円区画内に半截竹管による有節沈線文を充填する27は体部に刻みを配し、隆帯に指頭押圧を加える。30は有節沈線のみ。19、20、25、26、32を除き胎土には雲母をやや多量に含み、色調は暗褐色から黄橙色、細石を含む。阿玉台II式。

第8図33～39は梢円区画内、これに沿って角押文と大小の刻み目を施すもので、器形は深鉢形土器が大半、内側には明瞭な稜が見られる。33は複列の角押文と体部に爪形文、34は口縁部に爪形状文を配し、口唇部に円形の突起、脣部に半截竹管による弧線文を施す。口唇部に刻み目文をもつ36、37は体部に半截竹管による平行沈線、38、39は大形の爪形文を主体とする深鉢形の土器で、器形は概ね口縁部が外反し内側に顕著な稜を持つ。密な角押文を持ち、波頂部から垂下する隆帯には指頭圧痕が見られる。阿玉台II式。

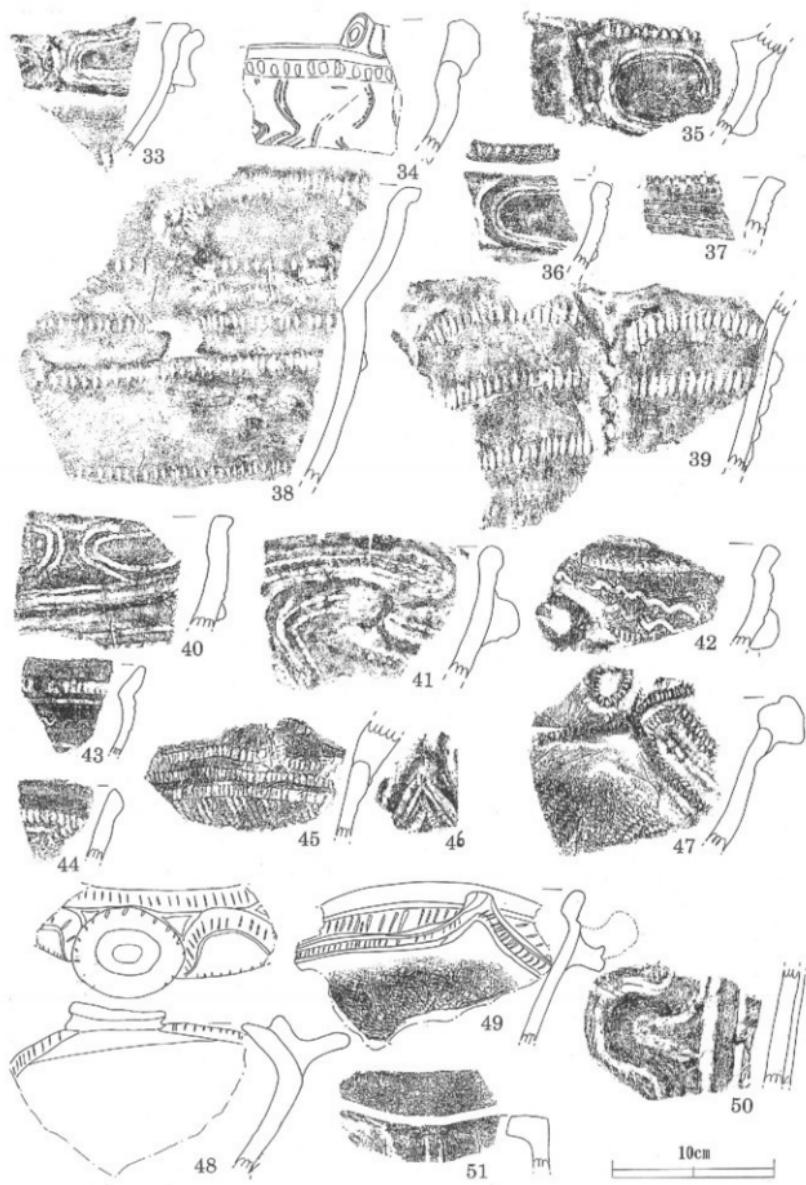
40～42は有節沈線文、波状沈線文、密な角押文をもつ一群の土器で隆帯間の梢円形区画内に有節沈線文を複列配し竹管刺突を加える40、隆帯が突起状を呈しこれに沿って有節沈線文を複列配する41があり、42は口縁部が内傾する鉢で隆帯に円形、波状文にこまかい刻目文を配し鈍い赤褐色で雲母をやや多く含む。49は深鉢形土器で突出する隆帯に48同様こまかい刻目文、口縁部との間に沈線を縦位に施し、口縁部は磨消、脣部に僅かに単節の繩文を密に施文。50は体部に隆帯による縦位、クランク状、これに沿って沈線を沿わせ、条線に近い刻目文を持つ。51は口縁部が内側に屈曲する鉢形土器と思われるもので器面は磨消、本例のみ。48～51は、いずれも勝坂式で鈍い橙色で雲母の混入は、やや少ない。51は細石を多量に含む。

第9図52～61は磨消の体部にアナダラ属の貝散文を持つ52～55と刻目文を持つ58～62の一群が見られ、器形は平線で口縁部が膨らみ外反、脣部は円筒形、内側の稜はやや顯著。口唇部は内側にカット状の52、54とやや丸味をもつ57、59、61が見られる。口縁部の「V」字状隆帯のみの58、59と垂下し押圧を加える55、隆帯区画に施文する59がある。刻目文も60、62のように口縁部と脣部に二段のものと口縁部に二段、体部に二段の61、体部のみの57など一様ではない。60、62は弱い波状で頂部に突起を持つ。色調は大半が暗褐色、54、55、59は多量の雲母を含む。阿玉台II式。63、64は隆帯に沿って複列の角押文を施文、63はLRの繩文地上に施文、阿玉台II式。65は隆帯に沿って押引き状の角押文を一列、内部に細い有節沈線をまばらに充填、66は半截竹管を口縁部隆帯に縦位に施文、色調は暗褐色、微量の雲母を含む。阿玉台III式。

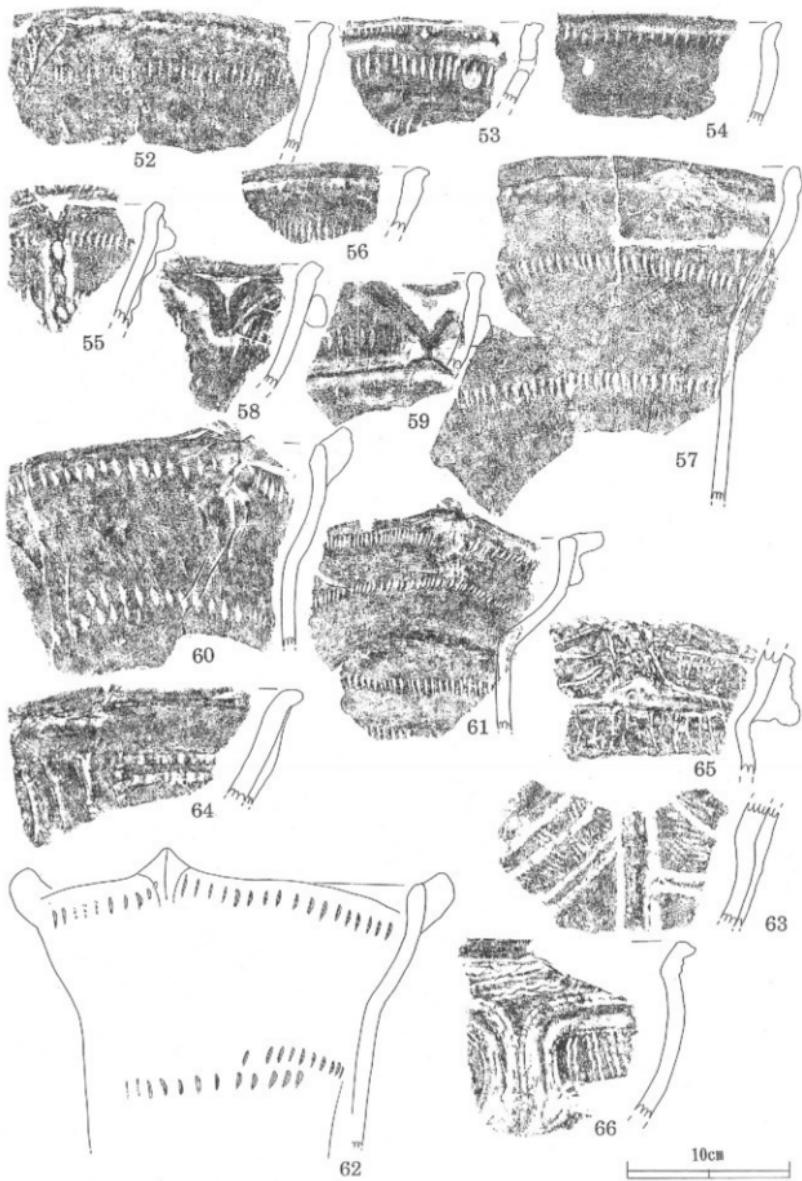
第10図67は口縁部隆帯と波頂部から垂下する隆帯に刻目文、脣部に円形刺突文を持つ深鉢形土器で阿玉台II式。68～71は浅鉢形土器の口縁部で丸味を持つ、阿玉台II式に伴う一群。72～74は波頂部が扁状になり刻み目を施す。波頂部から垂下する隆帯が「の」の字、また逆「の」の字状を呈し、間には密な半截竹管押引文を充填する73と平行沈線と波状沈線、角押文的な72と74がある。本類例は少なかった。色調は褐色～暗褐色で雲母はやや多量に混入。阿玉台III式。隆帯が迫あがり橋状に変化する75、76は刻み目を入れ地文に繩文RLを持ち76は体部に沈線による渦巻文を持つ。いずれも深鉢形土器で暗褐色、橙色で胎土に雲母をやや多量に含む。77は脣部、口縁部とも磨消、口縁部はやや鋭角的で口唇部に刻み目を施し鈍い赤褐色。



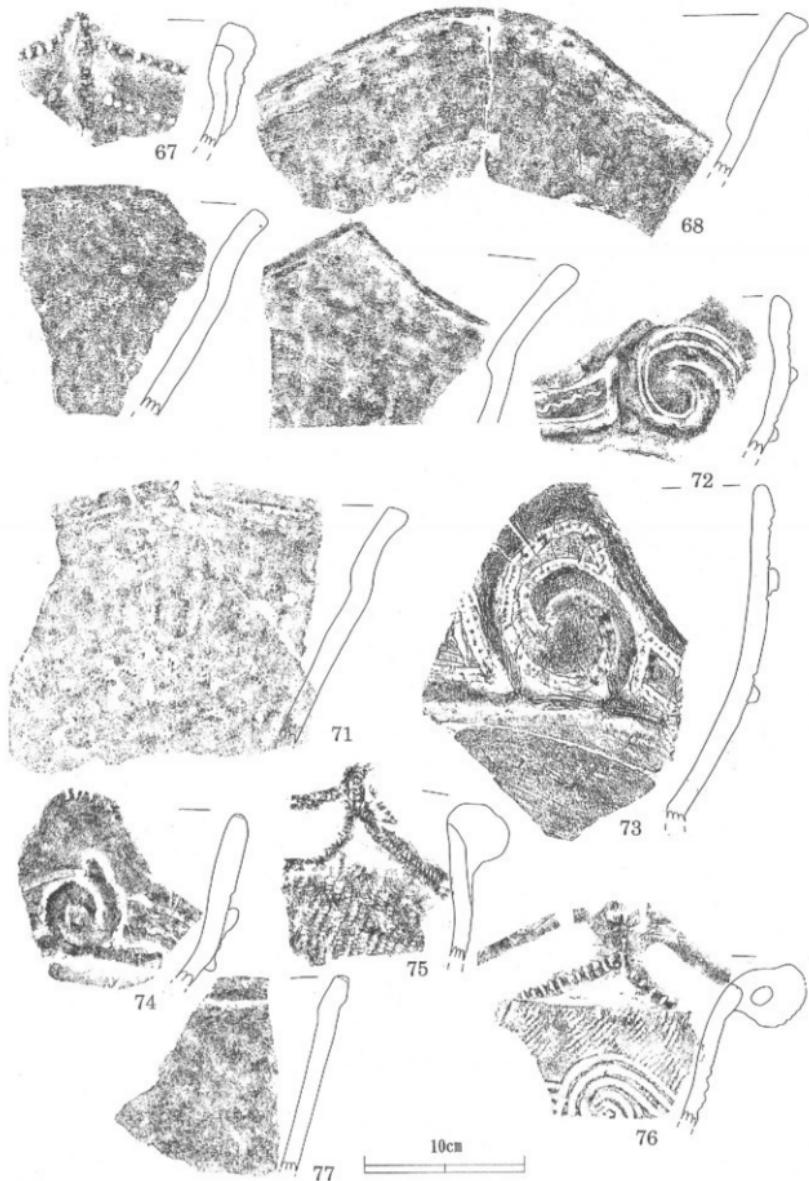
第7図 2区出土土器実測図



第8図 2区出土土器実測図



第9図 2区出土土器実測図



第10図 2区出土土器実測図

第11図78～80、82の器形は、口縁部が外反する深鉢形土器で波頂部から「の」の字状から「く」の字状に隆帯を垂下させ刻目文を施す。口唇部も同様で隆帯区画内には半截竹管による押し引き、平行沈線、波状文を充填。82は単節の繩文地に押し引き、波状沈線を施文する。内側の稜は顯著で胎土に雲母を含み類例は少ない。阿玉台Ⅲ式。81、83、84も深鉢形土器で平縁もしくは弱い波状か、口縁部は直線的に立ち上がる83は口唇部で強く外反、隆帯には半截竹管による波状沈線、有節沈線文で繩文地に半円形または「の」の字状に施文、81は隆帯に、84は口唇部に刻み目を施す。雲母をやや多量に含む。85、86は繩文地に沈線により蕨状、渦巻文、四角形区画などモチーフ豊かに施文、口縁部は繩文を持つ87と無文の88があり、いずれも「く」の字状に沈線を施す。87は内面に隆帯を持つ。色調は鈍い褐色で胎土には微量の雲母を含む。89、90、91は無文地に5本単位の条線により弧状、渦巻文波状沈線を施文、90はやや小型の深鉢か。本例も胎土に微量の雲母と、砂をやや多く含む。

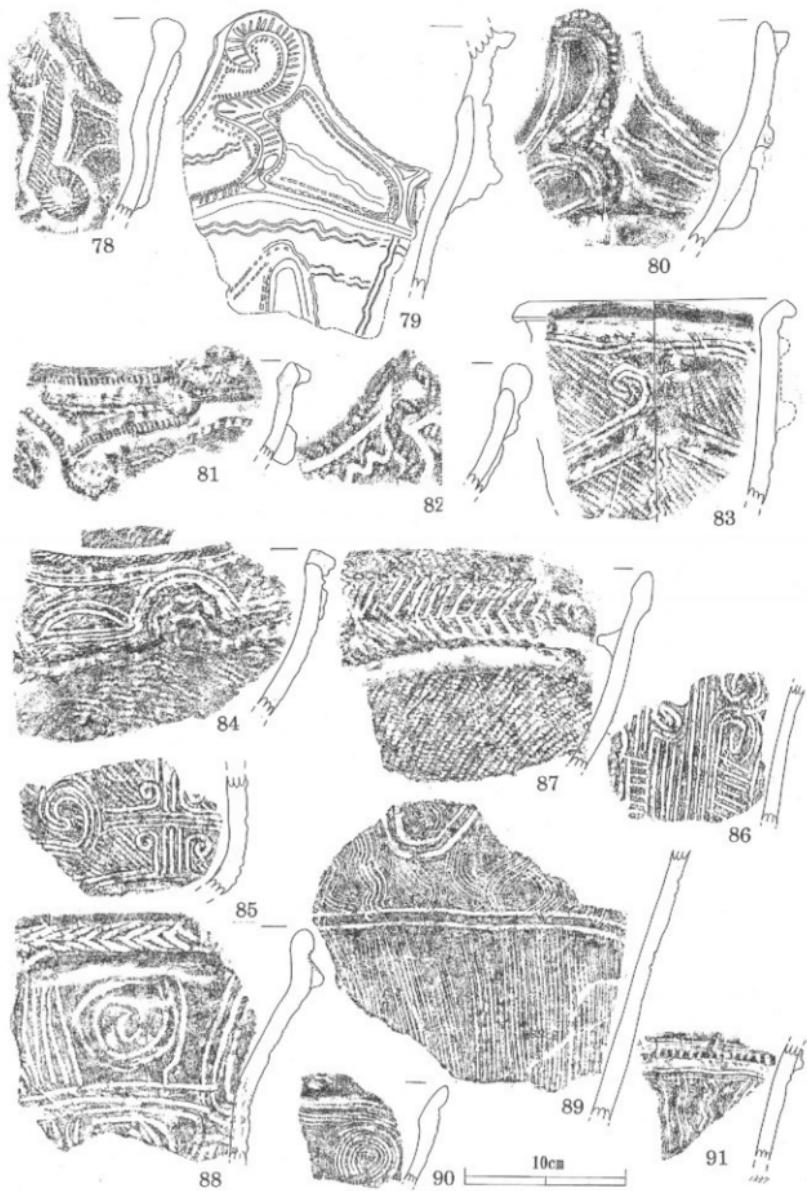
第12図92～102は100を除き地文にRL、LRの繩文を持ち隆帯により梢円の「し」の字状「Y」字状「の」の字状のモチーフを持つもので器形は深鉢形土器である。92は隆帯区画内に平行沈線、波状沈線を、93は扁状突起が変化したもので隆帯に沿って一列の押し引きと繩文を充填、94は波頂部に大きく三ヶ所の押圧を加え「Y」字部分は磨消、同様な99は平行沈線を半円状に、95、96、97は波頂部の山形部分の中央をカットして山状にし、特に97は意識的に双山にしている。100は波頂部に刻み目を施し逆「U」字状に隆帯が垂下する。5本単位の条線が直線、また波状に施文される土器で類例は少なかった。色調は暗褐色、胎土には少量の雲母を含む。いずれも阿玉台Ⅲ式・IV式。101、102は波頂部の突起が山形を呈し、渦巻のモチーフを持つ。101は波頂部から隆帯を「の」の字状に垂下させ、102は「I」字状、細かな刻目文を施す。いずれもRLの地文を持つ。

第13図の103は人面状の双孔を持ち、孔部、上下、表裏には半截竹管による押引文を施す。内側には一列の波状沈線を施文。色調は黒褐色、胎土には雲母の混入がやや多量、細石を含む。類例はない。104は大形の浅鉢形土器で口唇部に「S」字状に隆帯を貼付、体部は粗雑な調整で無文。褐色で雲母は微量。105も器形は深鉢で、口唇部に二条の交互刺突の沈線と刻目文を施す。105～112は深鉢形土器で口縁部無文帯、波頂部には刻み目、胴部には平行沈線、渦巻文、有節沈線などを施し地文にはRL、LRの繩文を持つ。色調は褐色で胎土には雲母の混入は少なく類例は少ない。阿玉台Ⅲ式・IV式。

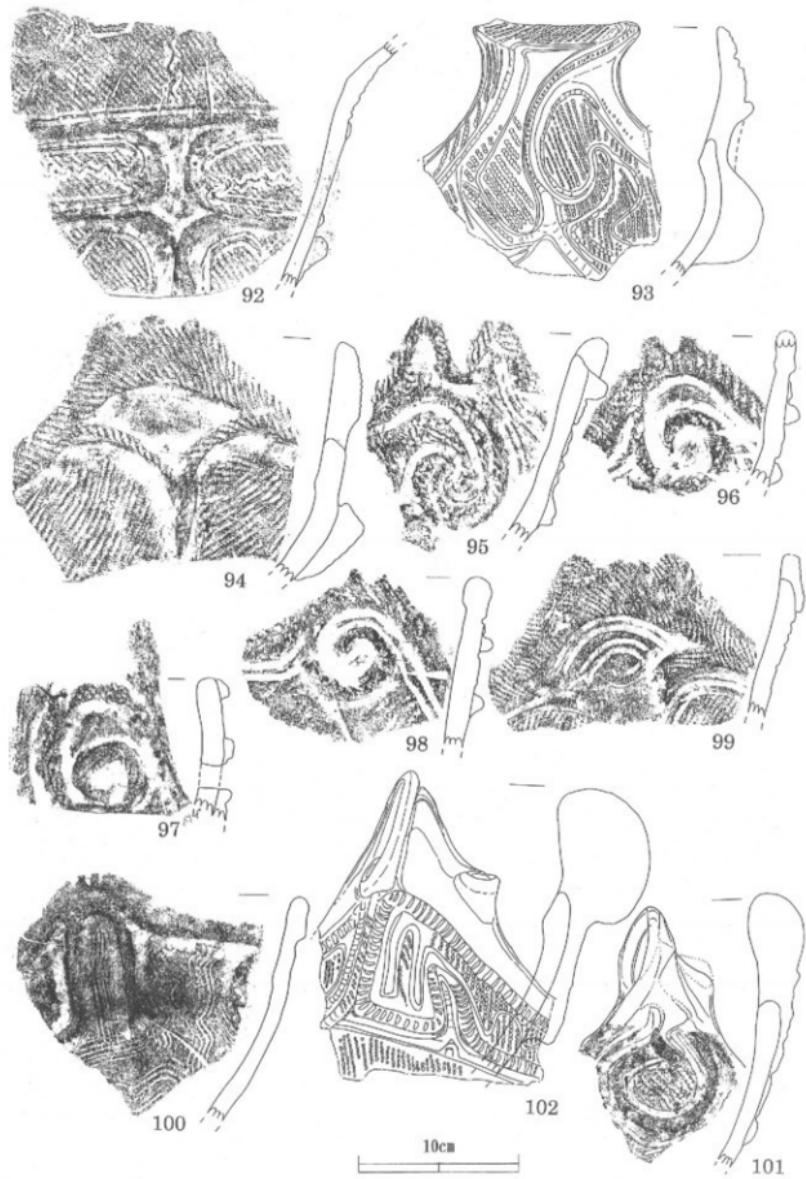
113～114は細かな繩文地に太い幅広な沈線間に波状沈線を施す深鉢形土器で器肉は薄く、色調は、黒褐色、暗褐色で胎土には雲母は極微量。類例は少ない。116は口唇部に幅広な沈線を二条持つ深鉢形の口縁部で体部はRLの細かな繩文を施す。117は小型の深鉢形土器で口縁部は無文帯、体部に条線文を縦位に施す。波状の118もある。119～122は5本、6本単位の条線文を施文具として用いる一群で出土土器の中で占める割合は一割以下であった。口縁部が強く屈曲し、胴部には6本単位の弧状沈線、器肉は薄い。出土例では直線状のものが大半で総体的には少ない一群の土器で雲母の含有量は少ない。色調は総じて黒褐色で焼成は普通で胎土に細石を含み雲母の混入は微量。阿玉台Ⅲ式・IV式に伴うものと考える。

第14図123～131は平縁の深鉢形土器で、口縁部に一段～三段の隆帯を持ち全面にRL、LRの繩文を施文する一群の土器。器形は、口縁部が直立気味の123、124と外反する125、129、内湾する127、128が見られ、130は口縁部が外反する。いずれも内側には明瞭な稜をもつ。隆帯間に沈線、有節沈線文が施文される。126、131は粗製土器か、胎土には雲母は微量。細石は前群と変わらない。色調は鈍い橙色、黄褐色。129、130は口縁部に隆帯、太い沈線による「V」字状「の」の字状に施文する。131は山形状波頂部を持ち刻目文が巡る。阿玉台IV式。

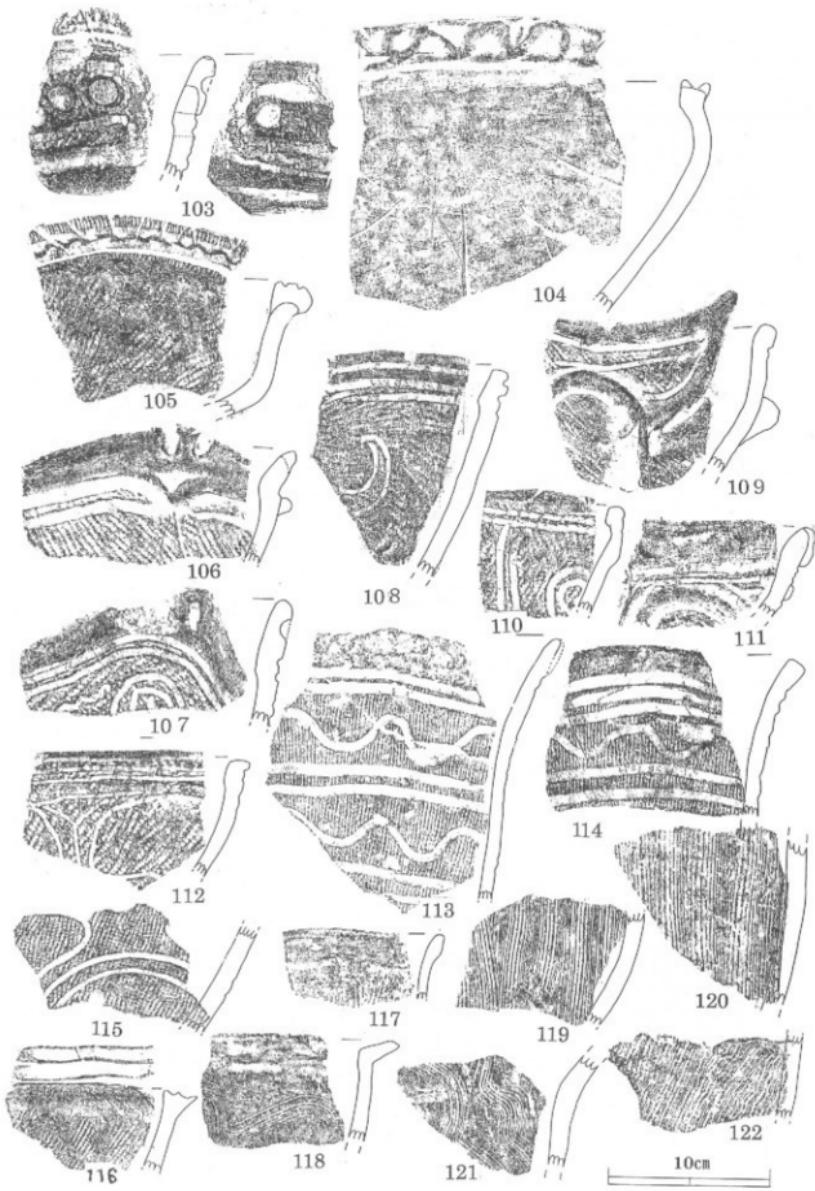
132は波頂部に橋状の把手、下位にも孔を持ち、体部は半截竹管による梢円形モチーフと平行沈線が施文され、133、134は口縁部に立体的な「S」字状文の貼付が見られる大木8a式で類例はなかった。口縁部の開き具合に差が見られる深鉢形土器で雲母は微量。色調は黒褐色で器肉は厚い。135は口縁部に円形の把手、変形の「S」字状沈線を縦位に貼付、間に三叉状の抉りや単節のRLを充填。136は、橋状の把手を持ち中央部に沈線背削りを施す。円形突起の円孔には太い沈線が



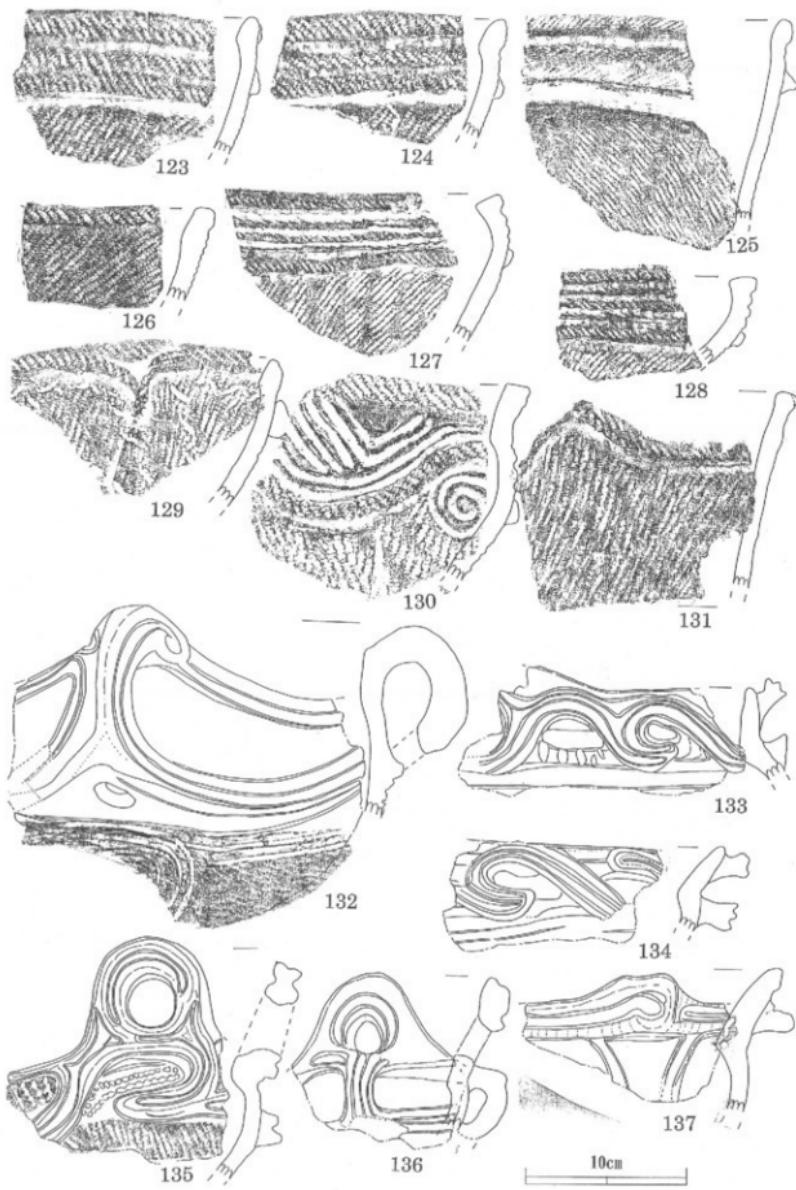
第11図 2区出土土器実測図



第12図 2区出土土器実測図



第13図 2区出土土器実測図



第14図 2区出土土器実測図

巡る。137は弱い波頂部に突起をもつ、垂下する隆帯間には縄文が施文される阿玉台IV式。色調は暗褐色、135は細石を多量に含み、136は黄褐色で胎土には雲母は含まず、137はやや多量の雲母、細石を含む。

第15図138～151は口縁部が無文帶でキャリバー状、波状を呈する。波状と平縁の加曾利E I式の深鉢形土器（143は五領ヶ台式）で、口縁部はいずれも隆帯により波頂部に円形や橋状の突起、隆帯貼付による渦巻文、クランク状文「S」字状文、交互刺突文を施文している。

橋状把手を持つ138は体部の縄文地に平行沈線を放射状に6本を施文、隆帯に縄文、橋状部に背割り沈線、区画内部にも縄文を施す。139は太目の沈線を区画内、体部に縦位にも施文。141は沈線間に縦位の交互刺突と隆帯貼付の波状文、胴部は縄文地。140は口唇部に太目の沈線と交互刺突の有節沈線、体部の隆帯区画に縦位、斜位の沈線。142も口唇部に太目の沈線、胴部にはR L縄文を施文する。144は棒状の細い突起を持ち二ヶ所に円孔を持ち、口縁部隆帯と橋状部に密な押引文を二列配し、突起の先端に渦巻文を施す。加曾利E I式。

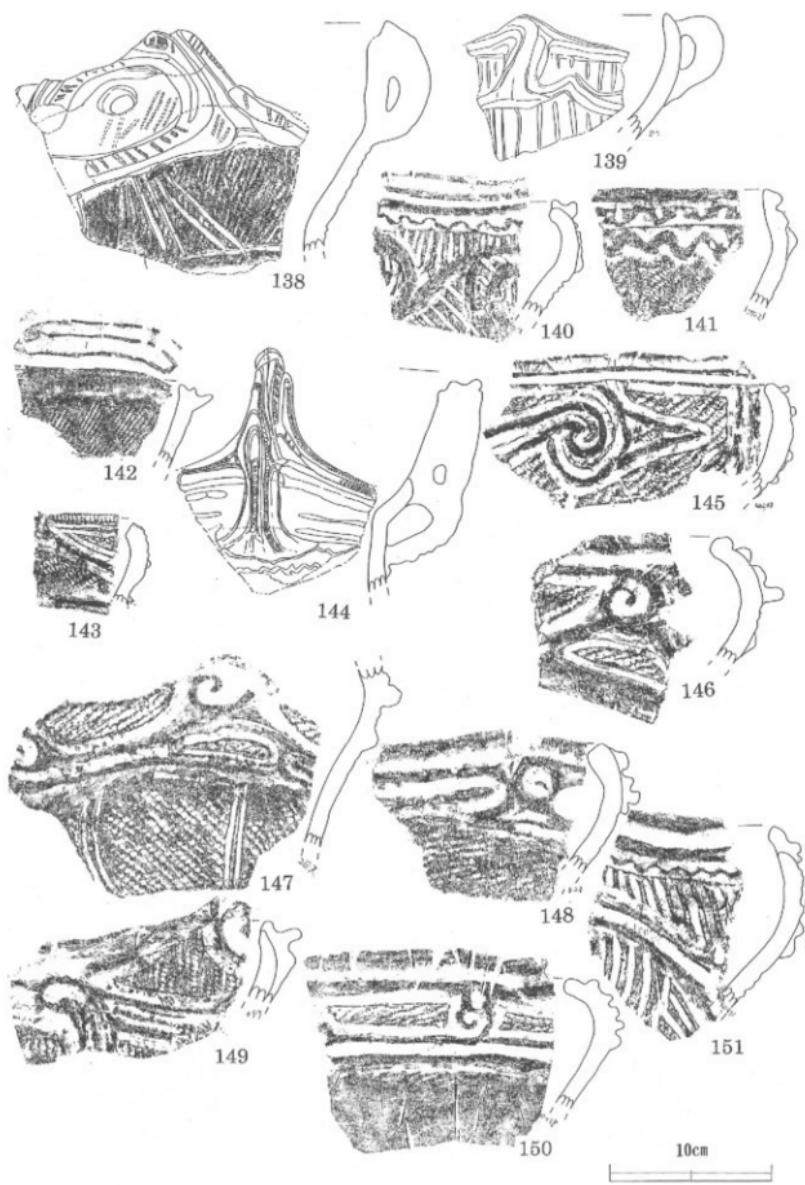
口縁部が弱いキャリバーを呈する143は小型の深鉢形土器で隆帯と沈線で三角形に区画、LRの縄文を充填、胎土には雲母を含む。五領ヶ台式。145～151は口縁部でキャリバー状を呈し、波頂部に隆帯による渦巻文や劍先状文を持ち、沈線区画による楕円文、地文としての縄文が施文される一群で胎土には微量の雲母を含む。本類は出土土器では一割前後を占める。151も器形は同様で口縁部に幅広い沈線、有節沈線、又幅広い縦位の沈線を施す。胎土の雲母は微量で暗褐色を呈する。151は東関東的な加曾利E I式土器。

第16図152～160は口縁部に磨消の無文帶、幅広な沈線、隆帯によるクランク状の156、渦巻文の154、155が見られ何れも縄文を充填する。無文帶下に平行沈線を施す157、幅広な158もあり156は磨消、口縁部は尖り気味で直立、粗製土器で前述の加曾利E I式に伴うもの。本類は出土土器の二割近くを占め、本貝塚が阿玉台式から加曾利E I式である傍証であろう。153は阿玉台IV式。160は縄文地に極細の隆帯を平行、波状に貼付、口縁部はキャリバー状。162～163は阿玉台式～加曾利E I式の底部で161、163は阿玉台式、162は加曾利E I式に伴う底部。

③ 3区出土土器（第17図、第18図）

本区は、2区の西側に位置し、やや強く東南側に傾斜を示す。遺物は2区と比べると半減、隣接する4区側では包含層も20cm前後となり傾斜も強く、遺物は3区の中でも少ない。全体で約2000片と完形土器が1点出土した。

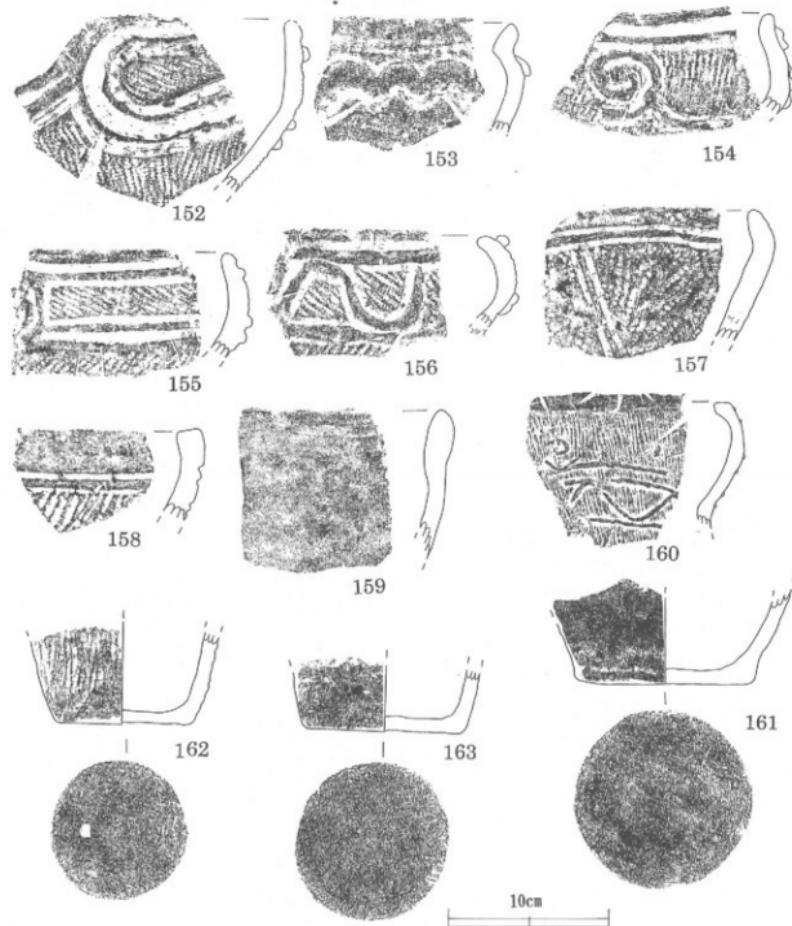
第17図は3区から出土した土器である。遺物の量は2区に比べ相対的に少なく、範囲、面積も少ない。1は横位または縦位に隆帯が貼付された楕円状を呈し、まばらな押引文（有節沈線）が隆帯に沿って施されている体部破片で黒褐色、胎土に微量の雲母を含む。2は楕円区画で隆帯はほそく、やや貧弱で1同様雲母は少なく、砂がやや多め。区画内に角押文は見られない。内面の稜はしっかりしている。平縁の土器で阿玉台II式。3、4は口縁部に磨消部を持ち隆帯に沿って半円形の有節沈線押引文を一列、胴部には有節沈線下位に刻目文を配する赤褐色の土器で、4も同様な色調ではあるが、胎土には雲母は微量で差が見られる。阿玉台I b式。5は扇状突起頂部に刻みをいれ下位に楕円形状の隆帯を貼付、内外には半截竹管による平行沈線、眼鏡状や山形文が施文され黒褐色で、胎土に雲母は認められず砂がやや多く混入されている。6は口縁部に磨消部を持つ土器で、隆帯に沿ってこまかに押引文を複列、密に施す。黒褐色で胎土に少量の雲母を含む。7、9は弱い波状口縁を持つ深鉢形土器で7は、波頂部に小突起を貼付、隆帯が垂下しながら「コ」の字状に区画の中に半截竹管の丸味部を利用した押引文が複列にまばらに施文される。右側には隆帯部分に複列の角押文が見られる。類例は少なかった。9は体部から弱く張り口縁部に直口する深鉢で体部、口縁部とともに調整しても輪積み痕を残す。波頂部下に隆帯が短く垂下し、押圧を加え色調は褐色、暗褐色で雲母は微量。8、10は口縁部がやや開き気味の深鉢形土器で、口縁部と胴部の隆帯上下に押引文を一列もつ一群で、8は鋸歯状、体部に波状沈線が横位にみられる。10は斜めに並列して充填、体部は磨消。11は口縁部隆帯下と楕円区画に沿い半截竹管を用いた密な押引文を施文する。13'は口縁部



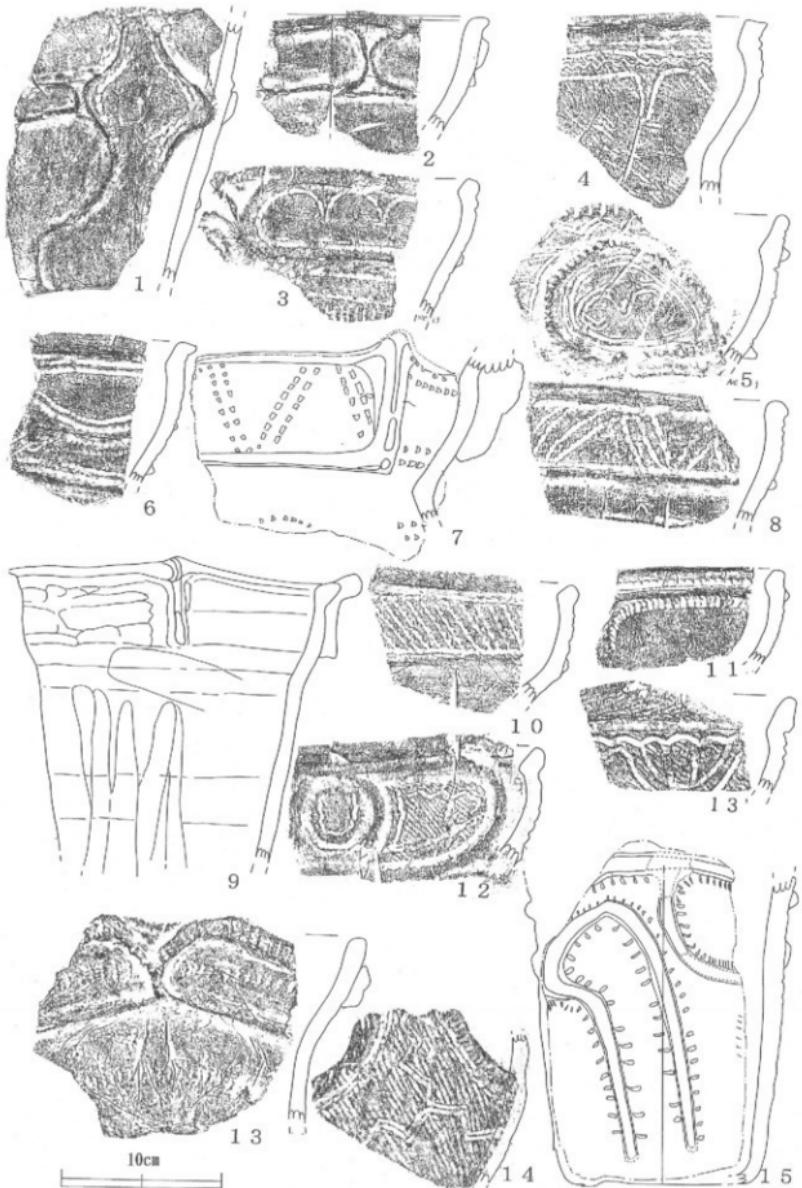
第15図 2区出土土器実測図

が外反する深鉢で波頂部から「Y」字状に隆帯を貼付、刻目文を施す。梢円区画内にはアナグラ属の貝殻文を充填、黒褐色。阿玉台II式。12はキャリパー状の口縁部を持ち、隆帯による梢円区画内に円形文が見られ、縄文を充填、半截竹管押引文を施文、雲母は微量、暗褐色を呈し細石をやや多量に含む。13は口縁部まで地文がみられ、横位の一列の沈線で区画、波状沈線、有節沈線を半円状に施文、雲母をやや多量に含む。14もR Lの縄文地の山形突起頂部で半截竹管により鋸歯状に施文。15は口縁部を欠失する土器で円筒状胴部、逆「U」字状の隆帯を貼付、まばらな爪形文が施文される。全体のモチーフは不明。胎土に細石をやや多量に含み、鈍い黄褐色。

第18図16は平縁の深鉢形土器で口縁部は外反し「Y」字状隆帯から押圧され垂下する。地文はこまかなしRの縄が見られ、胎土には雲母、細石がやや多量に含まれ、黒褐色で本例は量的に



第16図 2区出土土器実測図



第17図 3区出土土器実測図

は少ない。17は梢円区画に沿って半截竹管の爪形文を密に、沈線により鋸歯状文を横位に施文する。口縁部と胸部にしRの縄文を施文、雲母をやや多量に含む。鈍い赤褐色、阿玉台Ⅲ式。18は縦位に隆帯を垂下させ、また沈線を用い渦巻文を複列で施文、構成は二段になるか。雲母を含み、黒褐色～褐色。阿玉台Ⅳ式土器。19、20、26、27は条線文を持つ一群の土器で19は波頂部に刻み、20は平行沈線の下位に、27は隆帯間にそれぞれ施文。26は腹部で隆帯による耳状の突起をもつ。雲母の含有は微量で鈍い赤褐色を呈する。阿玉台Ⅲ式からⅣ式に伴う土器と考えられる。21は波状を呈し隆帯間に複列の半截竹管による押引文が施文、黄褐色で少量の雲母を含む。阿玉台Ⅳ式。22～25は平線で口縁部は磨消、平行沈線、交互刺突文、有節沈線、鋸歯状文が施文される一群の土器で器形は深鉢で口縁部は外反、内側には稜は見られない。22、23の胎土に雲母は極微量。26は群馬県地域に見られる新巻類型とされる土器。28は弱い波頂部に隆帯による粗雑な「U」字状のモチーフがみられ、半截竹管による沈線が口縁部に沿って施文、胸部はし（無節）の縄文が施文されるのみ。胎土には砂の混入が多く、雲母は見られない。阿玉台Ⅳ式。

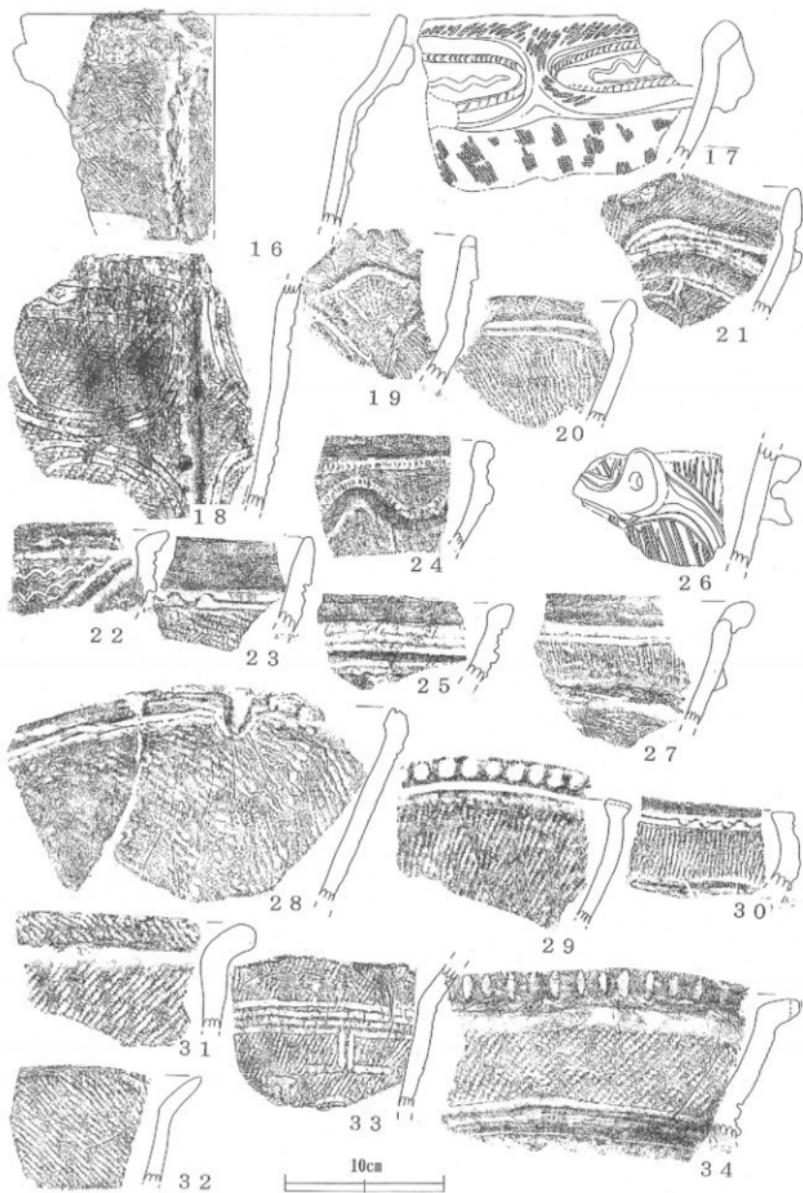
29は口唇部に指頭による押圧がある深鉢。30は口唇部が角張り、沈線と交互刺突を繰り返す。23に見られる手法で中峠式。31は口唇部に折り返し状に隆帯を貼付、口唇部から胸部にも縄文を施文する小型の深鉢。31は口縁部が「く」の字状に外反し口唇部は尖る。33は胸部で沈線が横位に施文され「工」字状モチーフをもち、下位に渦巻文か。沈線が覗く。34は口縁部が外反し、口唇部は水平に近くなり刻み目を施す深鉢形土器。31、32、34は阿玉台式に伴う粗製土器。

第19図35は中空把手を有し内側にも1孔あり、孔の周りと頂部に三叉文と4本の太い沈線が施文され、胸部は縄文。隆帯が貼付されていたが欠失。37も中空で円筒状、前、左右、頂部いずれも通孔部に沈線が巡り、また横位の沈線が見られる。36は前後、左右、頂部に孔を持ち各孔は通じ沈線が巡る。頂部は端部が渦巻き、把手下位には縄文が施文される加曾利E I式。38、40、41～45は隆帯による円形、渦巻文、クランク状などの加曾利E I式土器。口縁部はキャリバー状、口唇部は沈線で磨消部、隆帯区画に縄文を充填、胸部に及ぶものと口縁部のみとに別れる。43は二条の沈線が垂下、いずれも深鉢形土器。少量の雲母を含む加曾利E I式。39は耳状の波頂部を持ち渦巻文が施文、波頂部下には逆「し」の字状文が複列施文される小型の深鉢形土器。雲母は極微量、42は無文地に二条の隆帯が垂下。

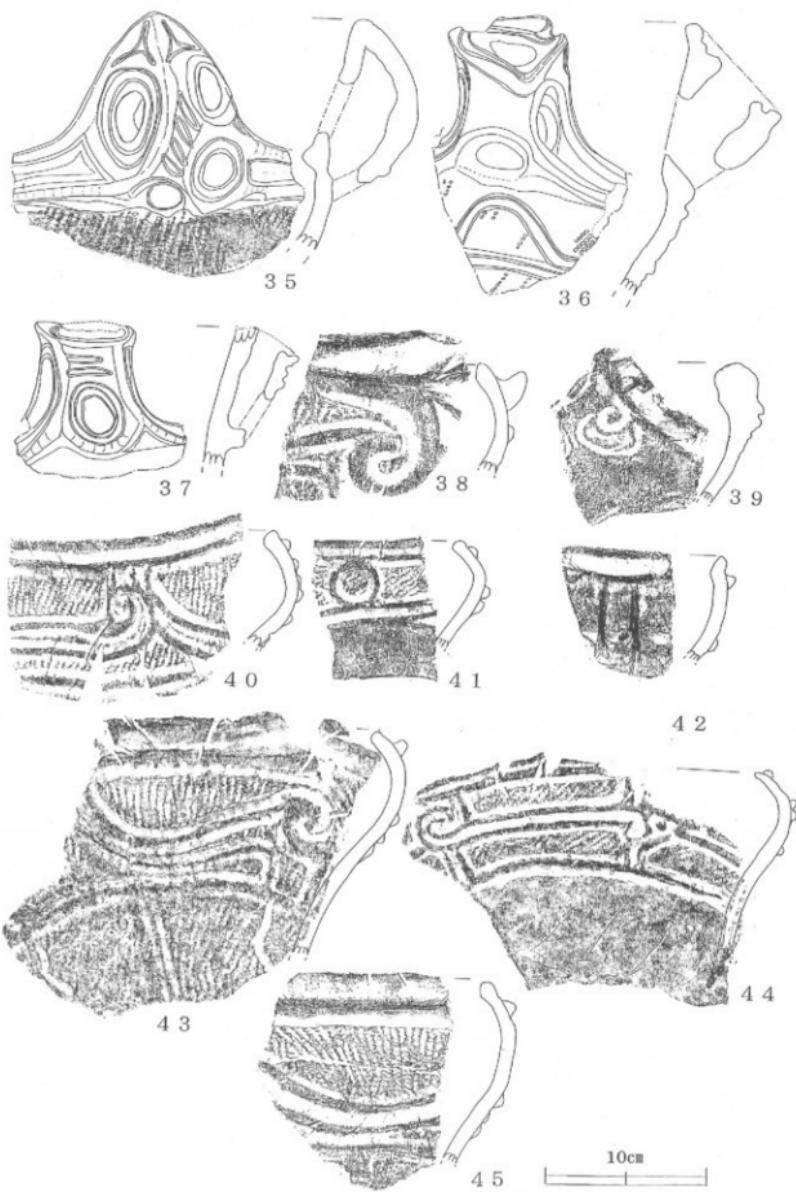
第20図46は深鉢形土器で口縁部に沈線、隆帯間（消失した）に縄文を充填、胸部も同様にR Lを施す。鈍い赤褐色。胎土に雲母を多量に含む。加曾利E I式。47、48は口縁部に無文帯を持つ深鉢形土器。47は、口縁部は直立気味で頸部に「S」字状隆帯を横位に貼付、胸部にもしRの縄文を施文。48'は複列の交互刺突文、頸部下端には波状隆帯を貼付、胸部は地文の縄文のみか。48は深鉢形土器胸部で器形は円筒状、地文は縄文、隆帯を挟んで半截竹管による複列の平行沈線文が上下に見られる。49は小型の浅鉢で口縁部は内傾し器肉は薄い。雲母は極微量。加曾利E式の範疇の土器。

50～54は底部破片で50は、鋭角的に立ち上がり、無文。51は底部から強く開いて立ち上がる浅鉢形土器。器肉は薄い。細石を多量に含む。阿玉台式。54は網代旗を持ち直立気味に立ち上がる。52、53は弱く張り立ち上がる底部で、地文にR L、L Rの縄文を施文する。胎土には雲母は微量。3区からは底部の出土割合は5%前後で比較的少なかった。

第21図1、2は3区出土の土器で1は浅鉢の完形で底部を下にして出土した。緩い波頂部と円形の孔を持つ把手と体部にも小孔を二ヶ所持つ。口縁部の隆帯には沈線を巡らせ、内側にも幅広な沈線が一周する。類例の少ない土器であるが勝坂系の土器であり阿玉台II式前後に伴うか。2は波状突起部と底部を欠失する深鉢形土器で、欠失するが、大形の橋状把手を有する。頸部には隆帯を横位に口縁部との間に波状に貼付する。（一部消失し地文の縄文が見られる）胸部は地文のR Lのみで出土土器には類例はあまりない頸部である。加曾利E I式。



第18図 3区出土土器実測図



第19図 3区出土土器実測図

④ 4区出土土器 (第21図)

第21図3からは4区出土土器で、本区は東、南側にかなり傾斜が強くなり表土下は白褐色の砂質粘土層で包含層も10~20cm程で遺物も総数で100片前後、図示できるものも少ない。3は器肉の薄い土器で平縁、口縁部に角押文も一列見られる小型の深鉢形土器で暗褐色。雲母の混入は少ない。阿玉台Ib式、2も器肉の薄い平縁で隆帯により「Y」字状文が貼付され一条の角押文が巡る。器形も1同様で阿玉台II式。5も平縁で口縁部隆帯に刻み目、縄文の地文を縦位の沈線で区画。6は指頭圧痕と梢円隆帯区画に沿って半截竹管による押引文を一列施文、押引文を充填、雲母を含む阿玉台II式。7は胴部破片で波状の隆帯に指頭圧痕が見られる。色調は黒暗褐色、暗褐色でいずれも雲母の混入は少ない。8は浅鉢形土器で口縁部近くに弱い後、内面には顯著な稜をもつ。外面は粗雑な調整で雲母を多量に含む。阿玉台II式前後に伴う。9は半円形の突起部で欠失し刻み目等の存在は確認出来ない。2区出土の例から推察すれば2乃至3ヶ所もつと思われ、雲母を多量に含み鈍い赤褐色。阿玉台IV式。10は下部に橋状、上部に中空把手をもつ深鉢形土器突起部で左側には隆帯に縄文を施文、間に交互刺突文を複列持ち、雲母は少量で暗褐色。11は波状口縁部の深鉢、梢円区画に有節沈線文、口唇部を除き梢円区画と胴部に縦位にはそい沈線を施文するもので類例は少なかった。雲母の混入は微量。12は円筒状の胴、底部で地文のみで鈍い赤褐色、雲母は微量の加曾利E I式。

II 土製品 土器片錠 (第22図 第1表)

本遺物の中からは土製品としては、土器片を利用した片錠と第25図8の環状の耳飾りの土製品が出土している。確認されたものは24点と少なかった。1区からは1点、2区からは18点、3区からは5点で4区からは認められなかった。(出土土器片全てを洗浄確認すれば数は増加する)

出土した片錠は16を除き長辺部に、縄掛けの刻みを入れている。23は円形状。重さは最大39g、23は34g、最小は9の7g。10gから20g前後であり平均値15gと比較的軽量のものが多かった。いずれも胴部片を用いている。18~21は2区5層出土。無文の18、19、20は縄文、21は山形文、22は沈線で長め、23、24は無文で阿玉台式土器片を利用したものは1、2、8、9、12、16、18、24で、3、4、5、6、7、10、11、13、14、15、17、19、20、22、23は加曾利E式土器片、21は大木8b式の胴部片である。

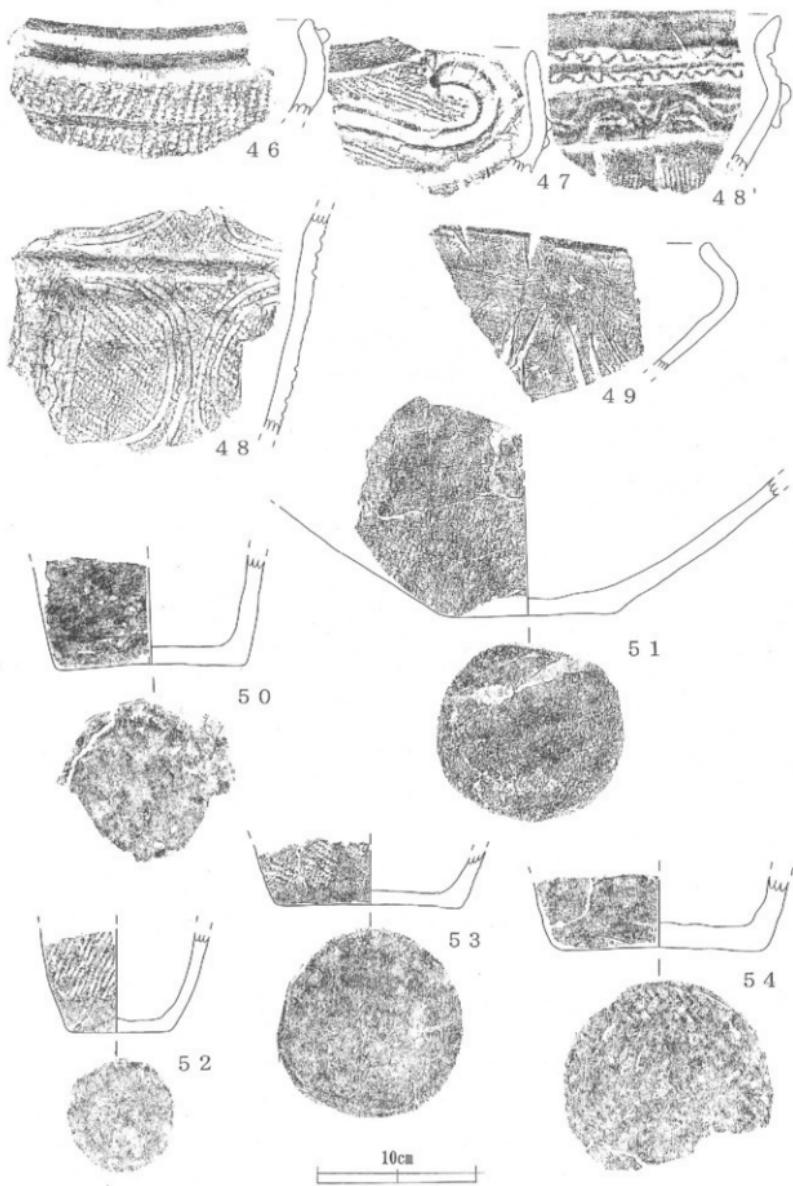
第25図8の土製品は径3·7cm、厚さ1·6cm、重さ7gを計る耳飾りで、ほぼ完形。

① 石器 (第23図~第25図)

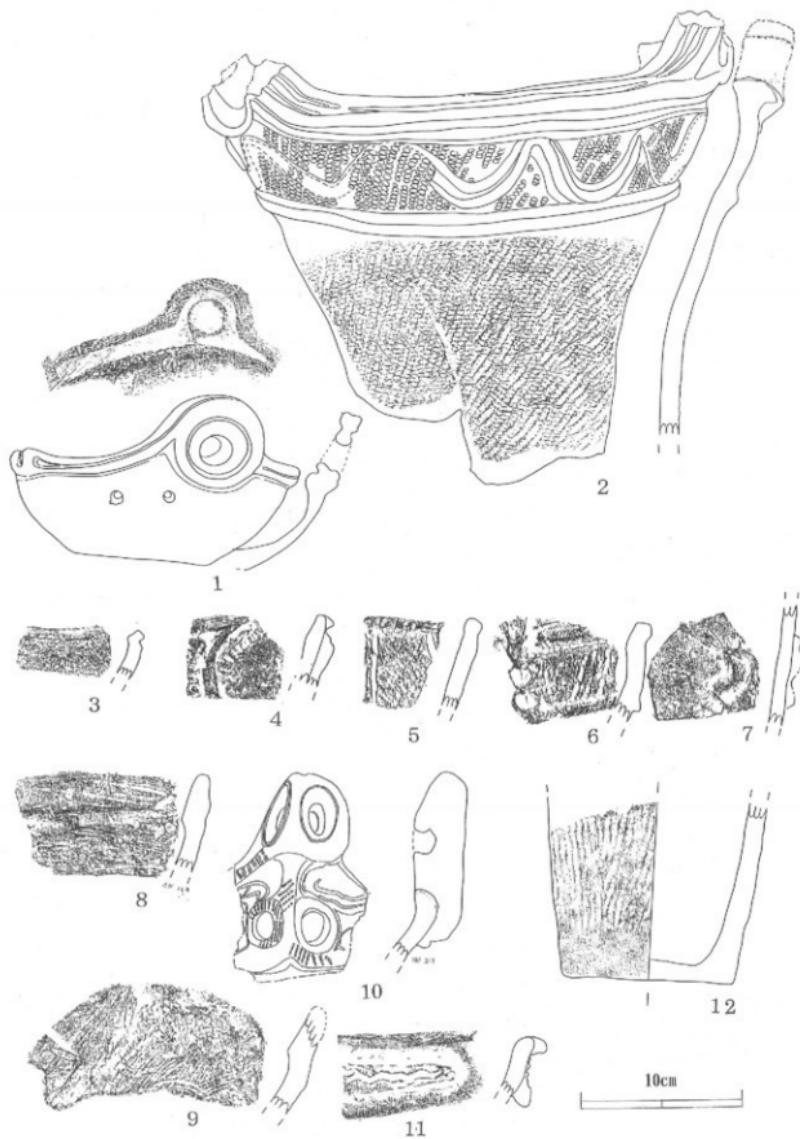
各調査区からは総数50点余の石器が出土した。そのほか原石、石核と思われるものも50点ほど見られた。出土した石器の大半は欠失したもので廃棄されたものと考えられる。

石鎌は第23図の1~4、6が出土した。7は石槍と考えられるもので先端部を欠失する。いずれも黒曜石である。石鎌は全体に長目で丁重な剥離痕を残す。5は三角形状で石鎌ではなく石錐。4は遺存長3cmと小型。

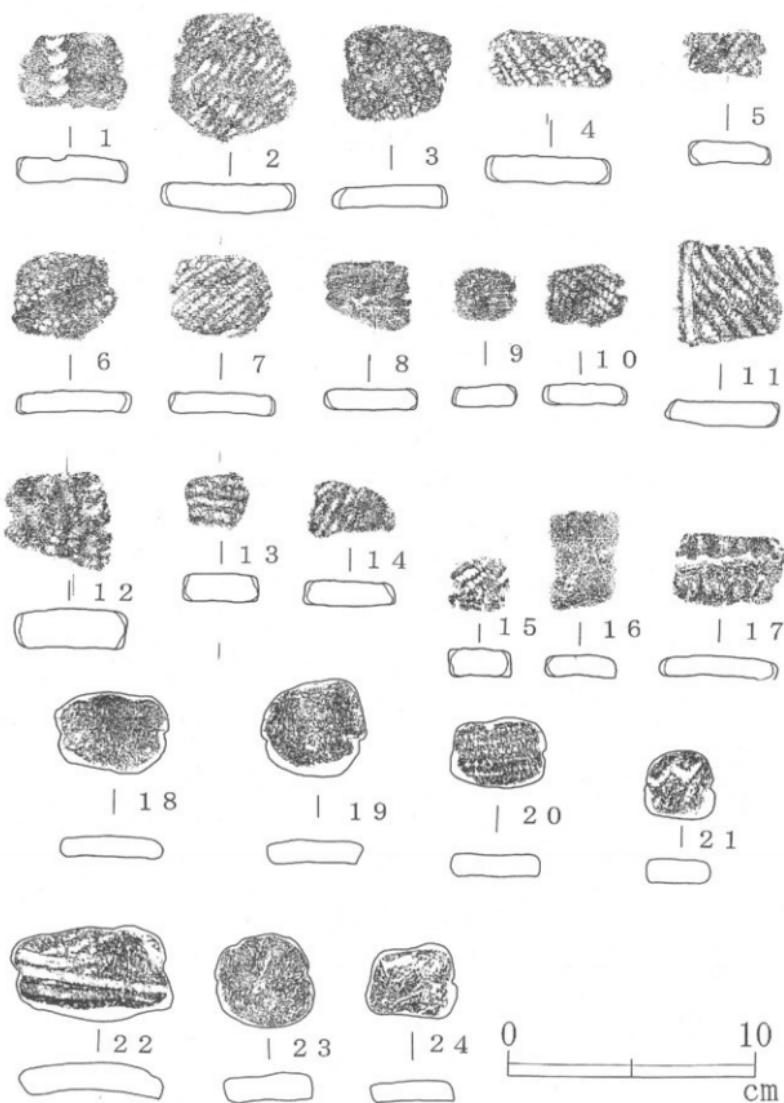
石器は、第24図、第25図に示すように磨製石斧や半磨製、粗製のものも見られたが、所謂打製の分銅型の粗製石器は1点も認められなかった。完存品が少ないため不明な点もあるが10cm~15cm前後のものが大半で比較的小型であり、特に第24図6は綠泥岩製で片刃の磨製石斧で長さ4·2cm。多くの石器は打製に用いた様で磨耗、欠失部を認め廃棄されたと考えられるものが大半である。1は始刃を呈し長さ8·2cm、2は一部欠失、刃部は鈍角。3は河原石に若干の加工をしたもので粗雑な剥離面を残し一部欠失している。4は擦石と考えられ、やや大型である。5も川原石を加工したもので欠失し、刃部は丸味をもち2同様叩きに使用されたものである。7は石皿の一部と思われる凝灰岩で凹部が認められる。



第20図 3区出土土器実測図



第21図 3区・4区出土土器実測図



第22図 各区出土土器片鉢実測図

第25図1は刃部、基部を欠失、2は磨製でハマグリ刃、3は半磨製完形品。4、5は基部を欠失、6、7、8、10は川原石を用いた小型のもの刃部、基部を欠失。9は磨製でハマグリ刃。11は石匙、13は瑪瑙製の擦石。12は敲石。

図版8は石器と擦石である。大半が磨製、半磨製の縁泥岩、ホルエンス、流紋岩、瑪瑙、安山岩などを用いていた。長さ16、5cmの大形の磨製石斧や、半磨製の石器で刃部、または基部を欠失し完形品は皆無。円形状の擦石、敲石と捉えられるものも見られた。大型で半截され火を受けた砂岩製のものも1点ある。擦石は、梢円、円形状で一方または左右両方、四方とも擦り減り使い込まれ、使用に耐えうるものも見られる。重量、大きさにも差異があり目的によつて使い分けられていたと思われる。総数8点。石皿の破片と考えられるものは総数3点、1点は図示した7。

3 貝類遺体と出土骨 (第2表 第3表)

貝類は前述の通りやや急な坂道、旧道に散在していたものを1区と2区に分けて採取した。採取した貝類は土囊袋で30袋程を数えたが泥土と瓦など他の戦後の遺物も混入しており、水洗いと遺物を取り除いた結果は4袋であった。

水洗いでは泥壁土のため普段の倍以上の時間を費やした。

区画した特別な理由はないが、強いてゆうならば二ヶ所のトレンチから別々に掻き出された可能性もあるため、それなりに差が認められるかどうかの期待もあったためである。貝類の同定には「標準原色図鑑全集3貝」を用い「行方市於下貝塚、井上貝塚、若海貝塚、土浦市上高津A地點調査報告書と、貝塚人の暮す海」小美玉市玉里史料館発行を参考にした。

① 種名の同定 (第2表、第3表)

1区では第2表に示す様に斧足類ではハマグリが総数2530点と圧倒的な割合を占める。次にオキシジミ、シオフキガイ、アサリ、サルボウが主でカガミガイも少量みられた。腹足類ではイボニナ、ウミニナ、アカニシ、イボニシ類及びイボニシが主体を占めツメタガイ、キセルガイなども認められたが、ナミシワガイ科が3142点と全体の5割を占める。

腹足類はイボウミニナ、ウミニナ、ツメタガイ、アカニシ、アラムシロ、イボニシ類、キセルガイ、カノコガイ、オオタニシの11種、掘足綱ではマテガイのみ、斧足類ではハマグリ、ウスマグリ、オキシジミ、カガミガイ、シオフキガイ、オオノガイ、アサリ、ハイガイ、スガイ、ナミマガシワガイ科、スミノエガキ、イタボガキ、サルボウ、シラトリガイ14種であった。

2区でも(第3表)1区同様の傾向を示している。採取した貝類はハマグリで重量は最大60g、多数を占めるものは2gから5g。殻高2・2cm、殻長7・7cm、殻高7mm～14mm、殻長32mm～55mmが多数を占めた。小型のものが中心であり、シオフキガイは2gから5g、オキシジミも同様な傾向を示していた。アカニシでは5gから30gないし40gが多数を占め、何れも小型である。シラトリガイ、カガミガイ、オオノガイ、ハイガイは皆無に近い状態であった。貝類は全体に小型で生育状態は悪い。

確認できた貝類は、当時の周辺海浜と海底の様相を如実に物語るものである。

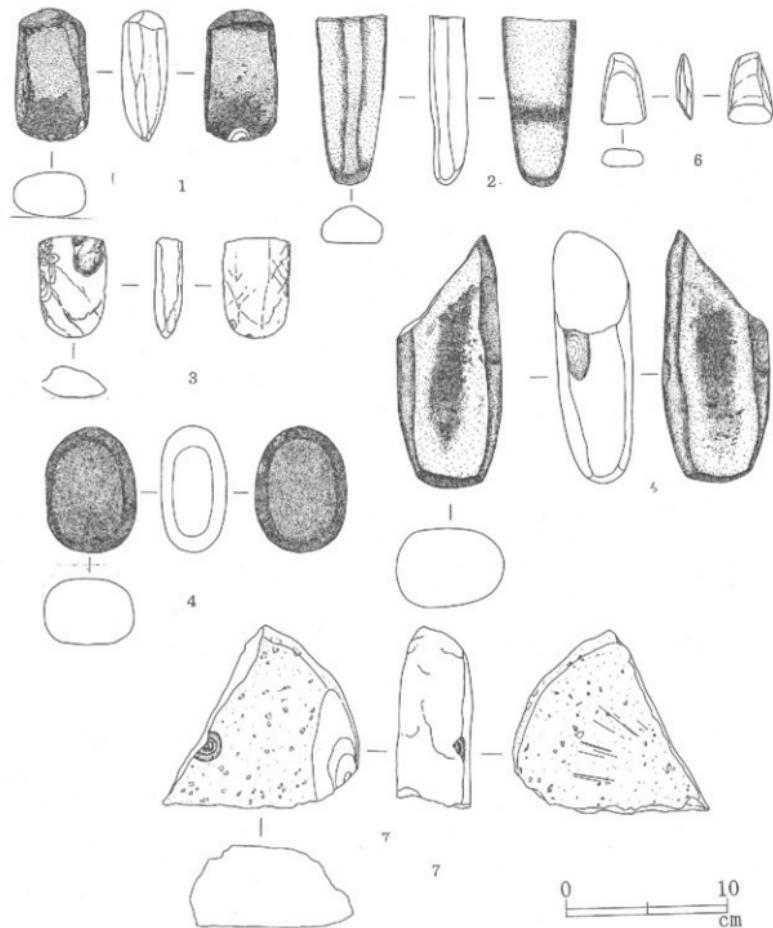
個体数は殻頂が確認でたものは欠とし、一個体として数えた。いずれの貝種でも完存率は30～40%代であった。これは前述したように「試掘」した貝類が道路敷きに使用されたものによる。

貝類に混入して土器片も検出されたがいずれも5cm未満、胸部片で口縁部は皆無、総数30片であり、本貝層が調査目的で掘られたトレンチから掻き出された貝類の一部であることを想定するものである。採取された貝類から遺跡の存在時は、内湾の浅い砂質、又は内湾岩礁、湾奥部砂泥質の海浜がうかがえる。

② 貝製品 (第26図)

採取した貝類の中にはハマグリの貝刃以外の貝輪等の製品と考えられるものは認められなかつた。貝の左右では左が7個体で右は2個体(6,7)が採取された。左右ではかなりの差がある。これは貝層が意識的に掘られて、主なものは採取され持ち帰られた可能性を裏付けるものとも思える。

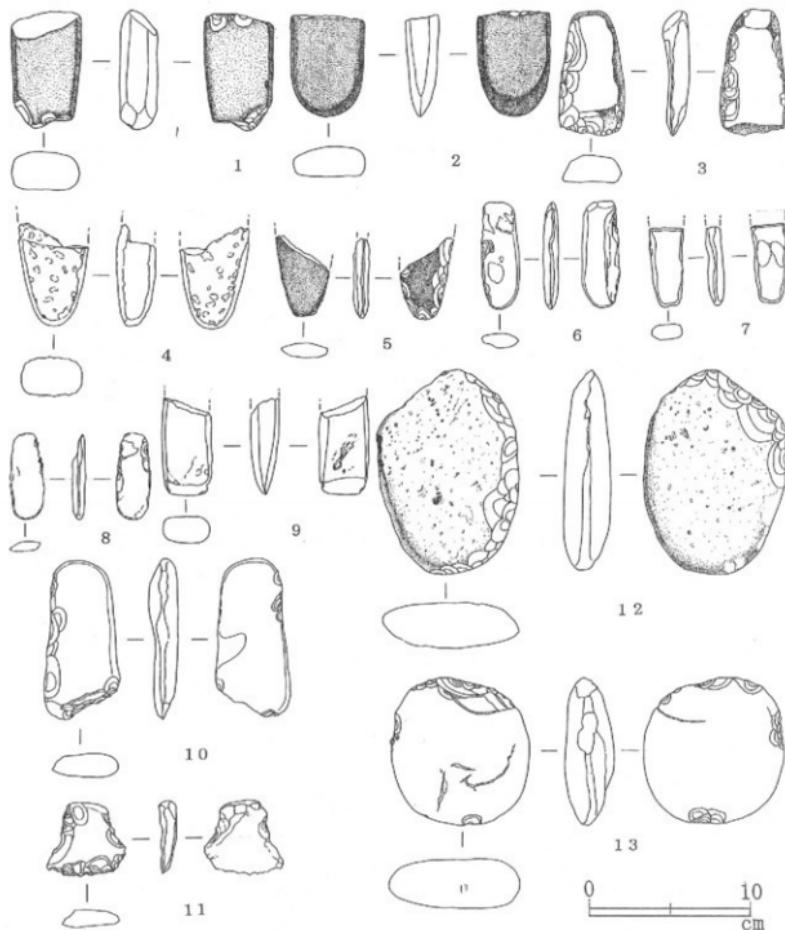
貝刃は内外から小さく剥離され、欠けた部分を再度剥離し使用したものも見受けられる。殻長は4~5cmで平均化しているが断定は出来かねよう。



第23図 各区出土石器実測図

③ 魚骨 (第4表)

採取された貝類の中に魚骨も認められたが、いずれも遺存状態は悪く数量的には少ない。魚種は12種が認められた。なかでもタイ類が最も多く認められた。そのほかフグ、スズキ、エイ、ウナギ、ヒラメ、ボラ、コチ、アジ、カタクチイワシ、アナゴ等が認められたが、遺存状態が悪く特定できないものも多く見られた。確認できる魚骨は大半が椎骨中心でタイなどにアゴ骨、スズキ方骨、コチの前鰓蓋骨も見られた。全体の半分以上の422片の鳥骨が特定できなかった。2区においても種には差ほどの違いは無かった。



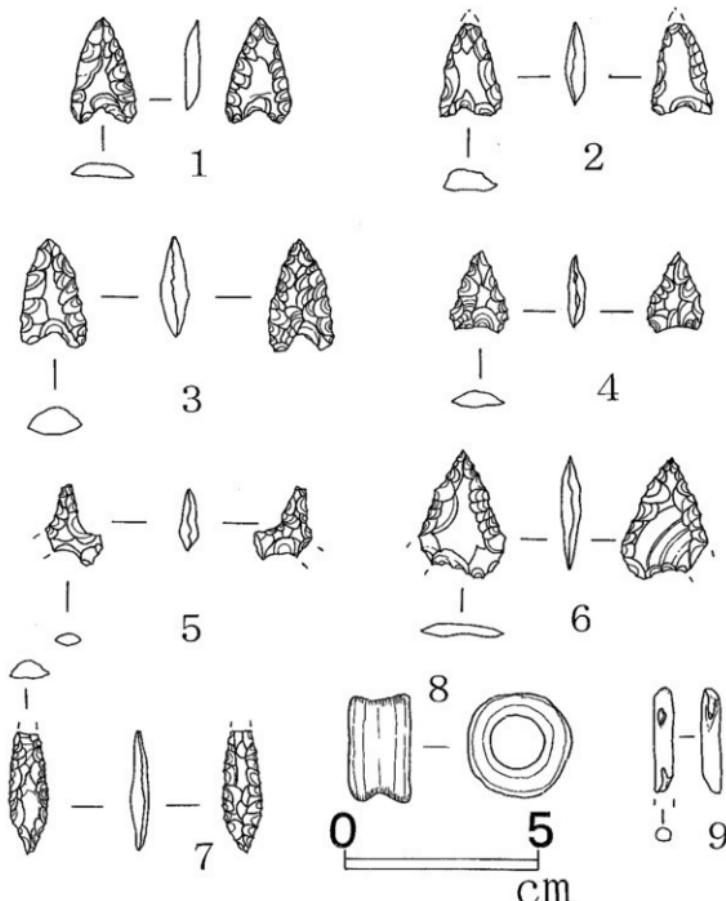
第24図 各区出土石器実測図

④ 獣骨、鳥類、爬虫類、その他 (第4表)

1区と2区では多少の差が認められた。獣骨は、いずれも3cm以下の小片で1cm以下が84片で総数118片認められ1区では、鳥類は、1cm以下のものが大半で種の特定はできなかった。魚類及び鳥類551片があった。

爬虫類は、ヘビ63とカエル6の椎骨が認められた。

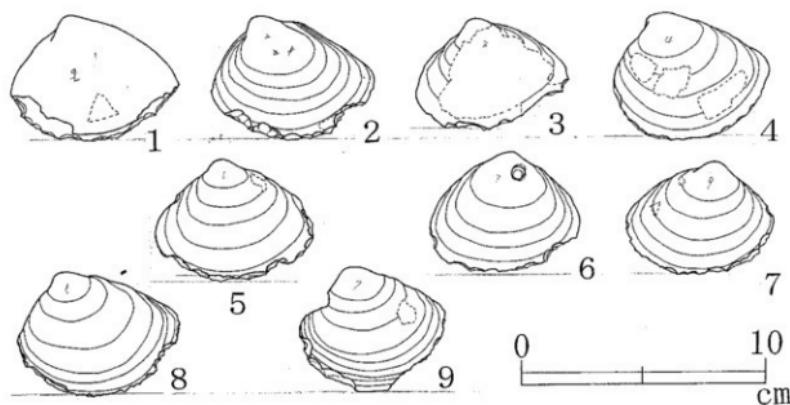
小動物と思われるものは31片、人骨と思われる小片と歯、その他小片の鹿の骨等と思われるもののがみられた。



第25図 石器実測図

これらの出土骨から骨製品と思われる第25図9があり、鳥類の手骨に穿孔があり縫い針に使用されたと思われる。

2区でも種はさほどの変化は無いが量的には差が認められた。



第26図 貝刃実測図

第1表 土器片錐

1	19.0 g	6	19.5 g	11	25.0 g	16	15.0 g	21	33.5 g
2	21.0 g	7	20.0 g	12	39.0 g	17	18.5 g	22	10.0 g
3	24.0 g	8	9.5 g	13	12.0 g	18	18.0 g	23	17.5 g
4	19.0 g	9	7.0 g	14	11.0 g	19	19.0 g	24	13.5 g
5	10.0 g	10	10.5 g	15	8.5 g	20	13.0 g		

第2表 1区・2区出土貝類と遺体表

1 区					2 区				
種名	左	右	備考	個体総数	種名	左	右	備考	個体総数
イボウミニナ				113	イボウミニナ				284
ウミニナ				148	ウミニナ				268
ツメタガイ			0.1g~30g	18	ツメタガイ			0.5g~15g	13
アカニシ			100g:80~50,40,30,20,10,5,1 ① (各3) ②(23)③(39)④(3)	124	アカニシ				
アラムシロ					アラムシロ				4
イボニシ類				65	イボニシ類				34
イボニシ				5	イボニシ				11
キセルガイ				14	キセルガイ				28
カノコガイ					カノコガイ				7
オオタニシ					オオタニシ			1g~17g	8
マテガイ					マテガイ				1
ナミガシワガイ科	3,142	909			ナミガシワガイ科	4,090	1,321	R 8g~54g×15mm L 10g~64mm×22mm L 6g~70mm×6mm	
スミノエガキ	3	3	R 85g~98mm×80mm×22mm R 90g~73mm×65mm×10mm R 15g L 65g~100mm×78mm×14mm カケ	6	スミノエガキ	3	10	R 94g~108mm×92mm×15mm R 40g(1)35~30g(4)20g(1)TF(4) L 30g(1)20g(2)TF(2)	
イタボガキ				3	イタボガキ				2
サルボウ	246	220			シラトリガイ	2	7		
オキシジミ	186 419	139 432	カケ R 10g(3) 15g(4) 3g(5) 72g(28) 1g(15) L 5g(5) 3g(1) 100g(30)		オキシジミ				
ウスハマグリ	1	1	R 12g~75×19 L カケ		ウスハマグリ				
ハマグリ	357 886	348 939	カケ	2,530	ハマグリ				
カガミガイ	4	2	R カケ L 35g~4g		カガミガイ	1	10	R カケ L 14g	
アサリ	16 47	16 41	カケ		アサリ				
シオフキガイ	61 242	40 225	カケ		シオフキガイ				
オオノガイ	1	1	R 5g L 4g		オオノガイ	3	4	1g~23g	
ハイガイ					ハイガイ				
スガイ					スガイ				1

第3表 1区・2区出土貝類と遺体数と重さ

1 区			2 区		
重さ(g)	数	アカニシ	数	アカニシ	
100	1	103×72	2	98×75~100×74	
80	3	89×65~92×60	4	88×70~90×64	
60	3	73×50~80×80	5	90×58~70×55	
50	3	71×48~70×50	10	70×50~70×52	
40	6	54×49~69×65	26	52×52~70×62	
30	23	52×48~67×52	22	55×48~65×53	
20	30	50×43~70×45	39	55×42~72×45	
10	39	32×26~53×42	69	34×25~46×34	
5	13	30×23~41×24	30	32×20~42×23	
1	3	15×10~29×21	14	26×17~32×20	
重さ(g)	L数	ハマグリ	R数	ハマグリ	R数
60				1	92×22
50		70×22	1	73×20	
25		67×18	1	61×18~67×20	11
15	1	59×13~60×18	1	64×14~65×17	10
10	95	53×14~55×14	11	47×10~51×11	15
5	90	47×11~51×12	23	43×11~48×12	140
3	93	43×10~44×9	140	42×9~46×11	247
2	46	32×7~33×8	106	32×9~38×10	260
1	33	25×7~28×8	65	26×6~28×6	108
欠	886		939	1,698	1,459
重さ(g)	L数	シオフキ	R数	シオフキ	R数
5	36	42×14~46×17	12	43×14~48×15	26
3	14	38×13~41×14	13	37×12~44×13	58
2	11	31×10~39×13	15	33×11~36×13	25
1			1	25×9~31×8	2
欠	242		225	273	276
重さ(g)	L数	オキシジミ	R数	オキシジミ	R数
10		46×16~49×17	3	10	43×16~50×16
5	56	41×13~46×17	54	120	39×14~43×15
3	100	36×11~43×14	37	92	35×12~44×16
2	30	32×9~38×12	28	93	30×11~37×14
1		23×7~30×9	16	26	24×8~28×9
欠	419		432	1,069	1,044

第4表 1区・2区出土魚骨、鳥骨、爬虫類骨等

1 区			2 区		
種族	種一覧	個数片	備考	種族	種一覧
魚類	タイ	62	椎骨2,アゴ骨細片17,その他43	魚類	タイ
	クロダイ	1			クロダイ
	フグ	1			スズキ
	スズキ	11	椎骨2,舌顎,方骨類9		エイ
	エイ	2	椎骨2		フグ
	ウナギ	15	椎骨15		ウナギ
	ヒラメ	1			コチ
	ボラ	2			カタクチイワシ
	コチ	4	椎骨1,歯骨2,前鰓蓋骨1		不明
	アジ	1	椎骨1		81 椎骨(ニシン・フナ?22)他59
	カタクチイワシ	33	椎骨33		413
	マアナゴ	1			
	不明	96	椎骨(ニシン・フナ?41)他55		
	不明	422			
獸骨	不明	118	中片(3cm以下)34,小片(1cm以下)84	獸骨	犬
					小動物
					20
					不明
					66 鹿, イノシシ 他
鳥類	不明	551	細片, 中12, 小539	鳥類	スズメ
					1
					486
爬虫類	ヘビ	63		爬虫類	ヘビ
	カエル	6			30 椎骨
小動物	不明	31	1, 6, 24		
	人骨	1			
歯類	魚類	18	タイ (17) 不明 (1)	歯類	タイ
	タヌキ	1			15
	人	1			2
その他	鹿角	2		その他	鹿角
	魚骨	1	製品か?		2
					球玉
					1 真珠か

※中片3cm前後 ※小片1cm前後 ※細片5mm前後

IV 結び

杉平貝塚は、標高30m弱の台地北側の斜面部の標高15mから21m付近にかけて貝層の堆積が認められ、面積は凡そ500m²前後。麻生の遺跡（注1）に依れば早期から中期にかけての貝塚と報告されている。

今回の市道改良工事において貝層本体は、調査対象からはずれた。調査は以前「試掘」されて旧道に散在していた貝類の採取作業が主であった。貝類は、大半が鹹水産で当城の中期貝塚で認められる貝種は、ほぼ確認されるが、ナミマガシワガイが量的に卓越していたことは、当時の内湾の海底状態を把握する上で注目に値する。また全体の貝類に言える事であるが、生育状態は悪く、小型。（注2）

骨類では動物種は皆無に近く、前述の「試掘」時に採取された可能性も考えられ、土器も同様で量的に30片程度であり、採取された可能性が高い。

魚骨類では数量的には別として、タイからウナギなど10種が確認出来た。ヘビなどの爬虫類やカエルなども認められ、魚類等は豊富に採取出来たと推察される。

土器は採取した貝類の中には皆無に近く、3cmから5cm前後的小片が30片と非常に少なかつた。（注3）これらは前に述べた土器群の胴部破片であった。

貝塚本体端部から下に2m程離れた斜面部、畑地耕作土の黒褐色土層、ローム層下2mほどの標高12m付近から土器の包含層が認められ、これらは標高7mの水田面近くまでの低地部にも及び、その多量さは類例を見ない。土器の認められた部分は擂鉢状に三方から落ち込み窪み状であった。出土状態は、廃棄され、また軽げ落ちた感じであり、特別な順序は認められず意識的な意図のもと捨て方とは理解出来なかった。

出土した土器の主体は阿玉台式、加曾利E式であったが前期の関山式、黒浜式、浮島式、興津式土器が認められ、黒浜、浮島式はやや多く認められたが全体の1成以下である。また勝坂式、中峠式、大木式など他の地方の土器、及び影響を受けた土器も見られる。

時期は前期の浮島式から始まり、興津式、中期の五領ヶ台式、阿玉台Ia式に続き、角押文を一列配するIb式から量的に増加傾向を示し、II式、III式、IV式に移行、加曾利E I式まで続く。量的にも阿玉台II式から後半の加曾利E I式までが卓越する。

器形は、口縁部が直立または開き、内側に稜を認める深鉢形土器が多数を占める。浅鉢も認められるが少ない。同III式以降では内湾気味のものが多く見られた。胴部は円筒状が大半であった。底部の出土は比較的少なかった。

口縁部の形態は、波状縁と平縁がある。割合的には波状のもが多く、把手が扁状を呈するものは僅かである。大半は隆帯が迫りあがり突起状に変化するものが多い。浅鉢では平縁で把手をもつ土器も存在する。

文様は隆帯区画に沿った一列の角押文から梢円、三角区画の隆帯沿い複列に変わり、半截竹管による押引文、沈線文に変わる。II式段階では有節沈線文や無文地に爪形の圧痕文を付与するものも一定の割合で見られた。胴部ではY字状に蛇行しながら垂下するものもある。III式、IV式では隆帯に沿って沈線文が多く見られ、地文には繩文が目立つ。また隆帯には勝坂式の影響を受けた刻み目を施すものが多くなる。

胎土には雲母片を含んだものが多く極めて特徴的である。

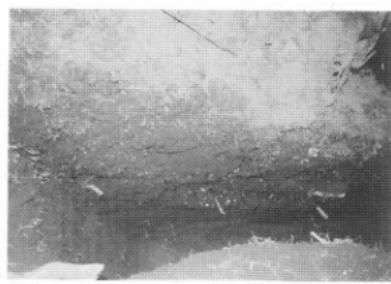
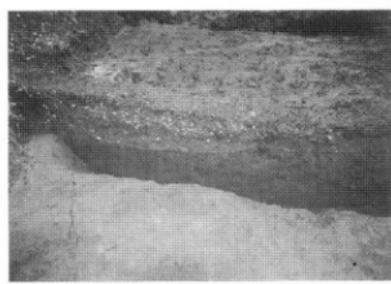
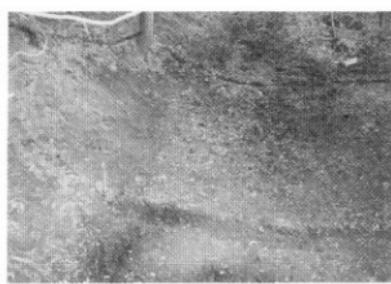
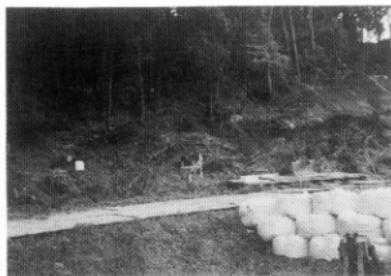
勝坂式、大木式、中峠式の搬入品と思われるもの、また影響を受けた文様、器形も一割前後存在する。

加曾利E I式の器形は深鉢、浅鉢、壺などが認められ、口縁部はいわゆるキャリバー形を呈するものが多数を占めた。口縁は平縁と波状縁が認められ、文様は隆帯貼付による横、S字状、渦巻、クランク状文が多数を占めた。胴部は円筒形と底部がすばむものも散見した。

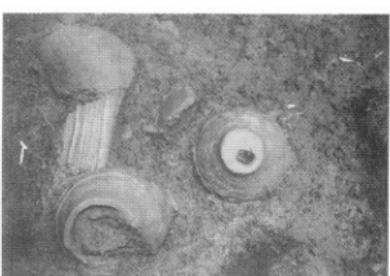
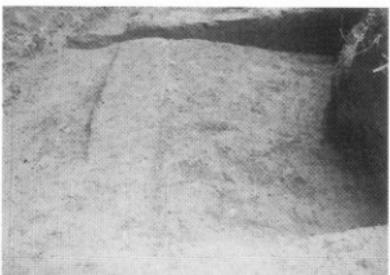
石器は供給地からの関係で河原石などを用いた貧弱なものが多く、小型で量的にも少なかった。大半が欠失して廃棄されたものであつた。擦石等も見られたが、いわゆる分銅型の石斧や石錐は1点も検出されなかつた。これは何を物語つているのか。疑問も残る。

- 注1 麻生町の遺跡によると早期田戸式から存在する。周辺の台地にも浮島式や弥生式土器が報告されている。 1997
- 注2 蔵川の中流域に存在、水田面では6m前後、本流では4mほどで当時は汽水状態か。
- 注3 「試掘」は調査のために掘られたものと思われ、土器は少なく、石器は皆無。掘り出され道路敷きに利用されていたため骨類の遺存状態は悪い。誰が、何時調査したかは不明。

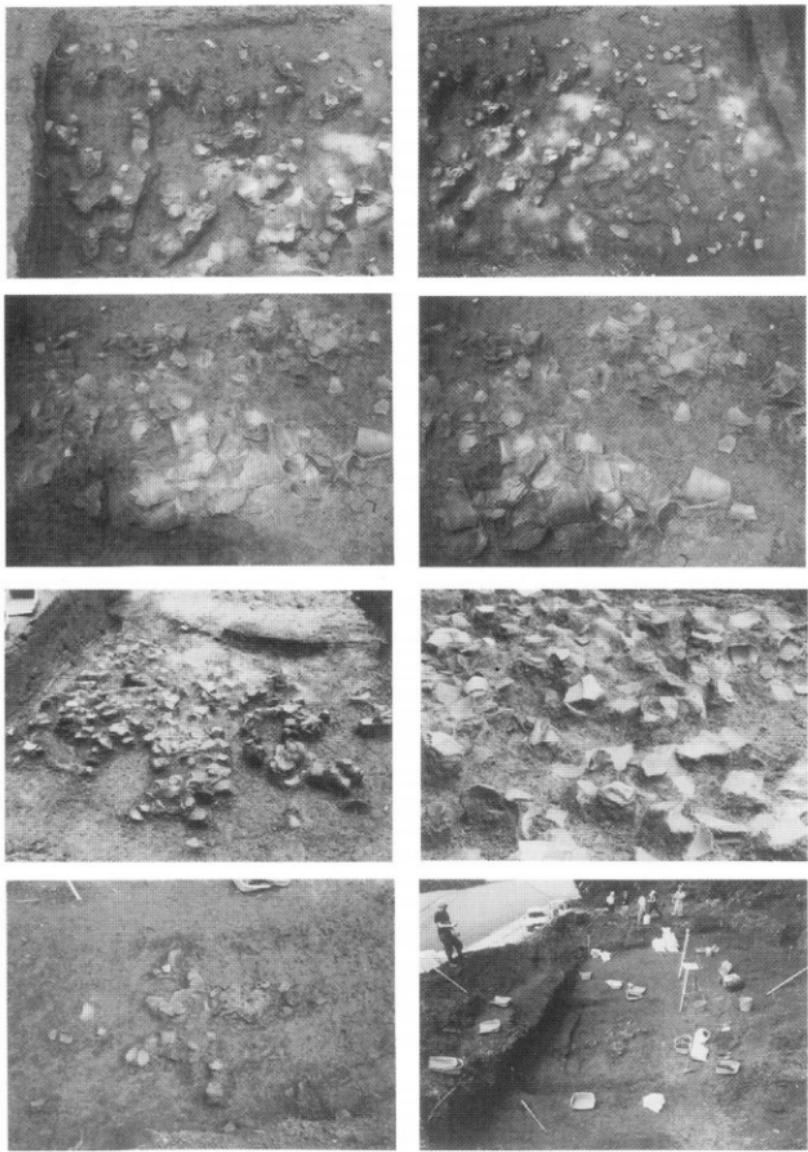
参考文献 学術研究第19号 早稲田大学 1970
玉里村立史料館報 Vo.10 11 2007
於下貝塚発掘調査報告書 麻生町教育委員会 1992
茨城県立歴史館史料叢書9 茨城の縄文土器 2006



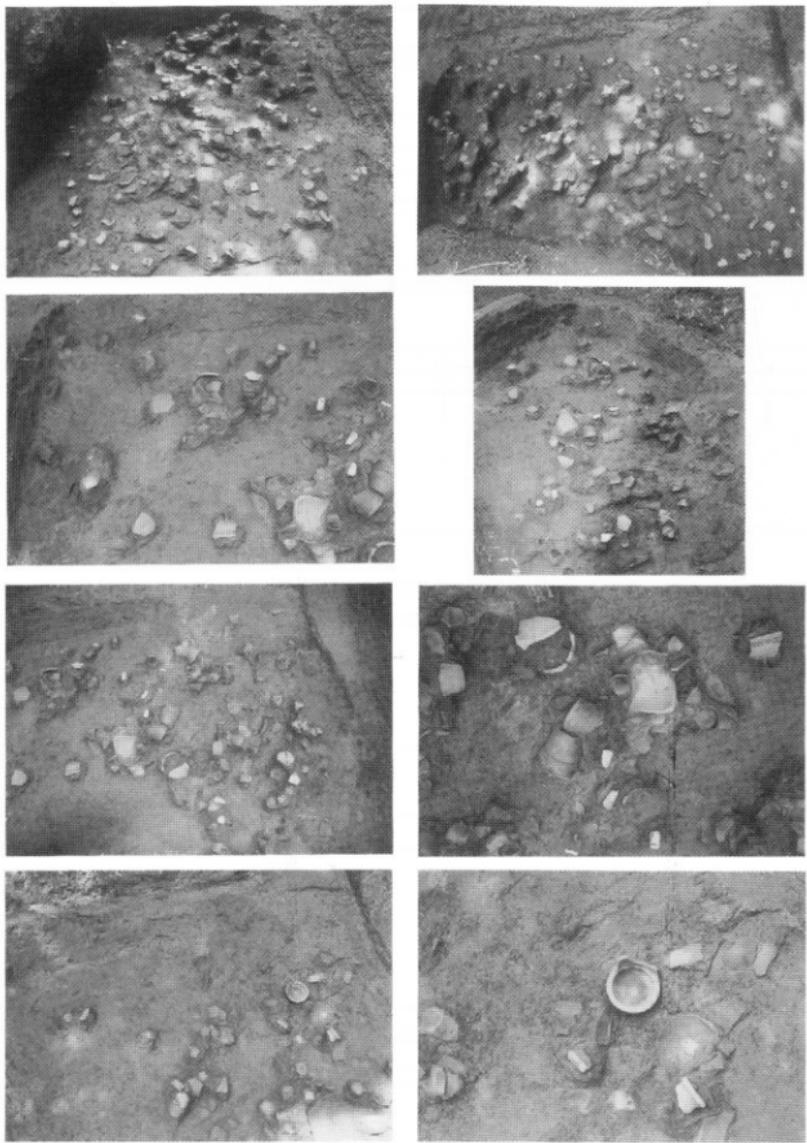
P L 1 調査前後と貝の状態、貝塚本体の貝層、1区採取後



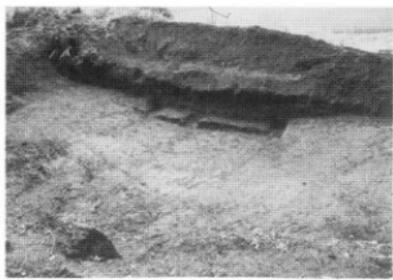
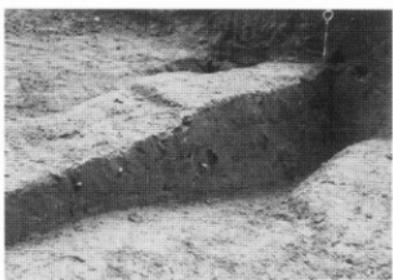
P L 2 1区・2区貝採取、確認トレンチと土器・1区の土器出土状態



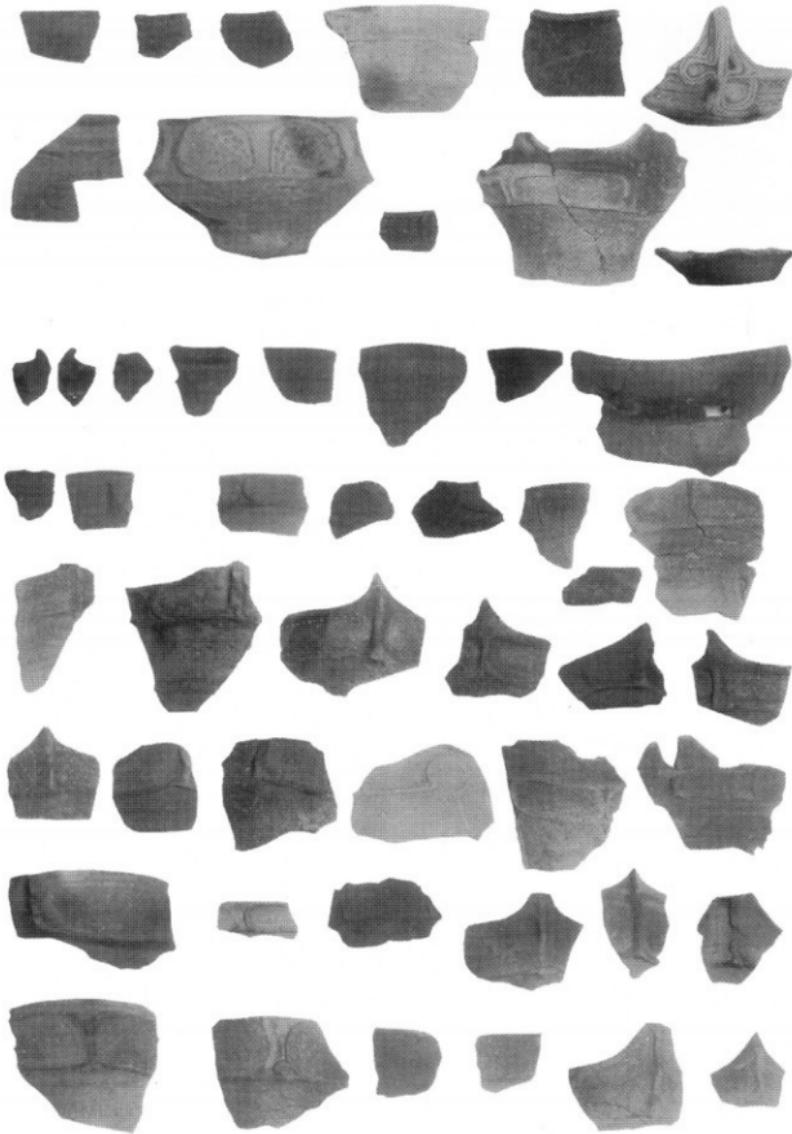
P L 3 2区土器出土状態



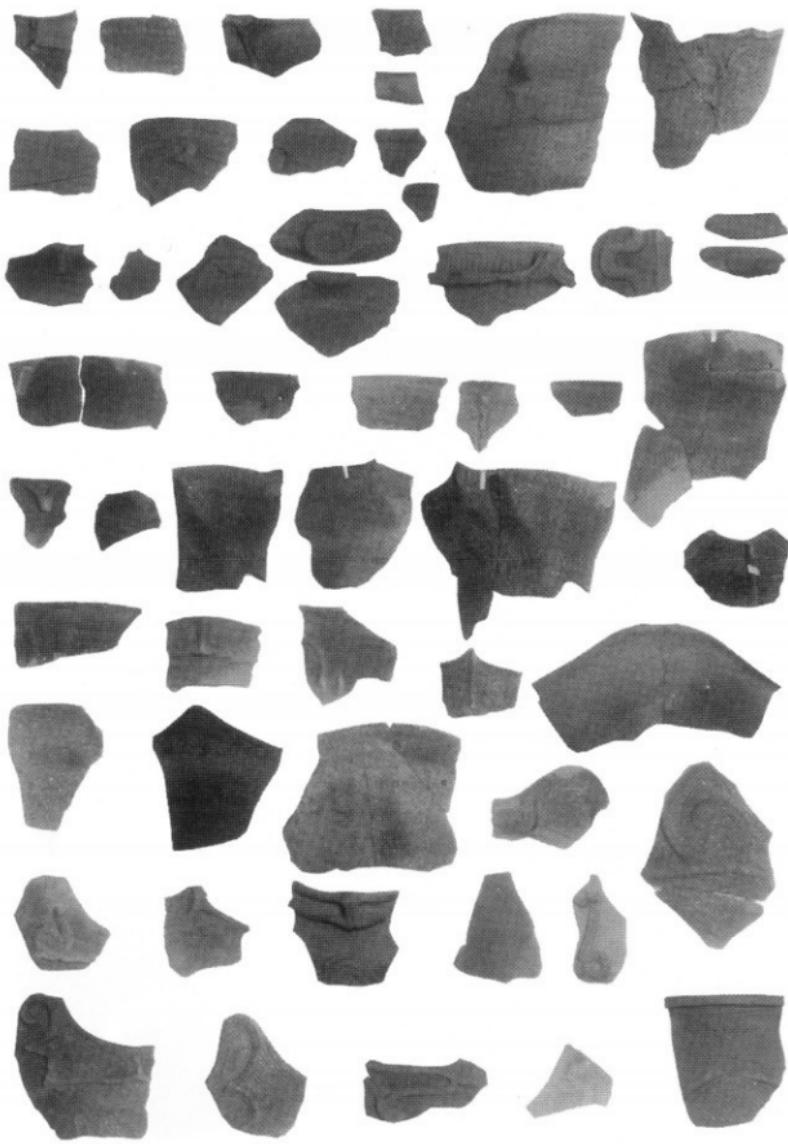
P L 4 3区土器出土状態



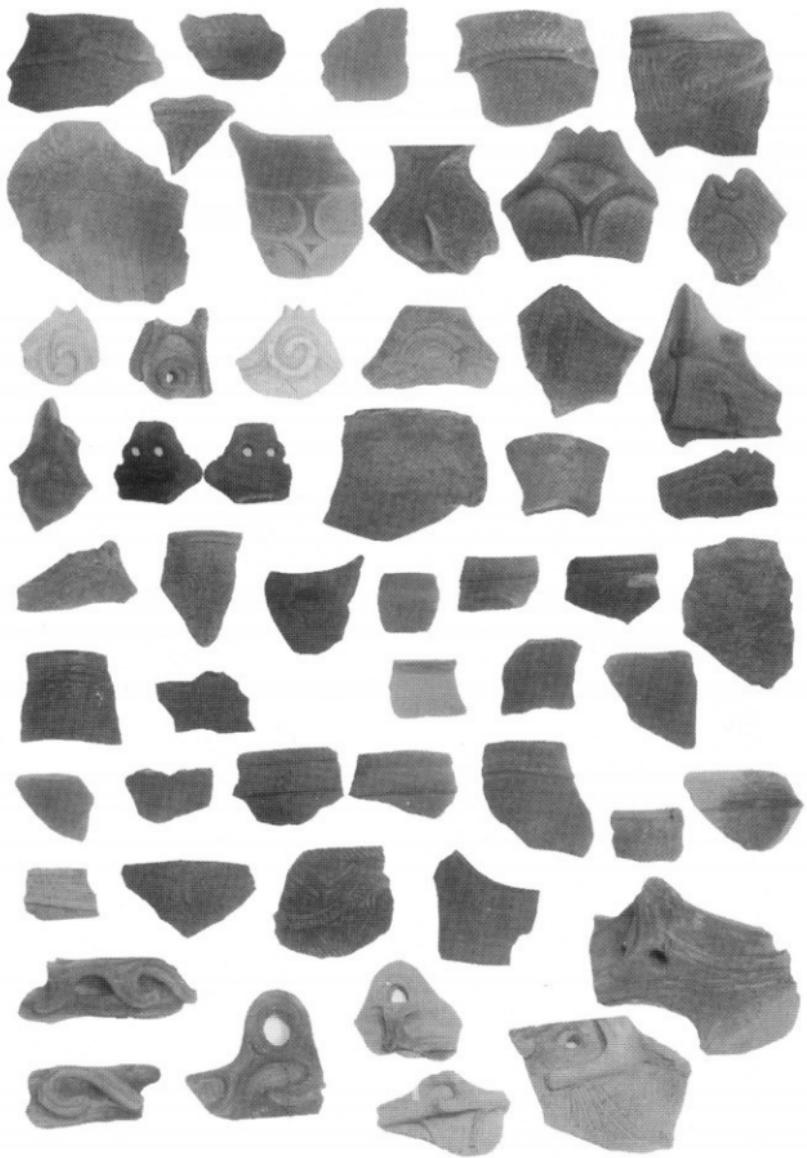
P L 5 1区・2区・3区土層、終了後の状態と水田



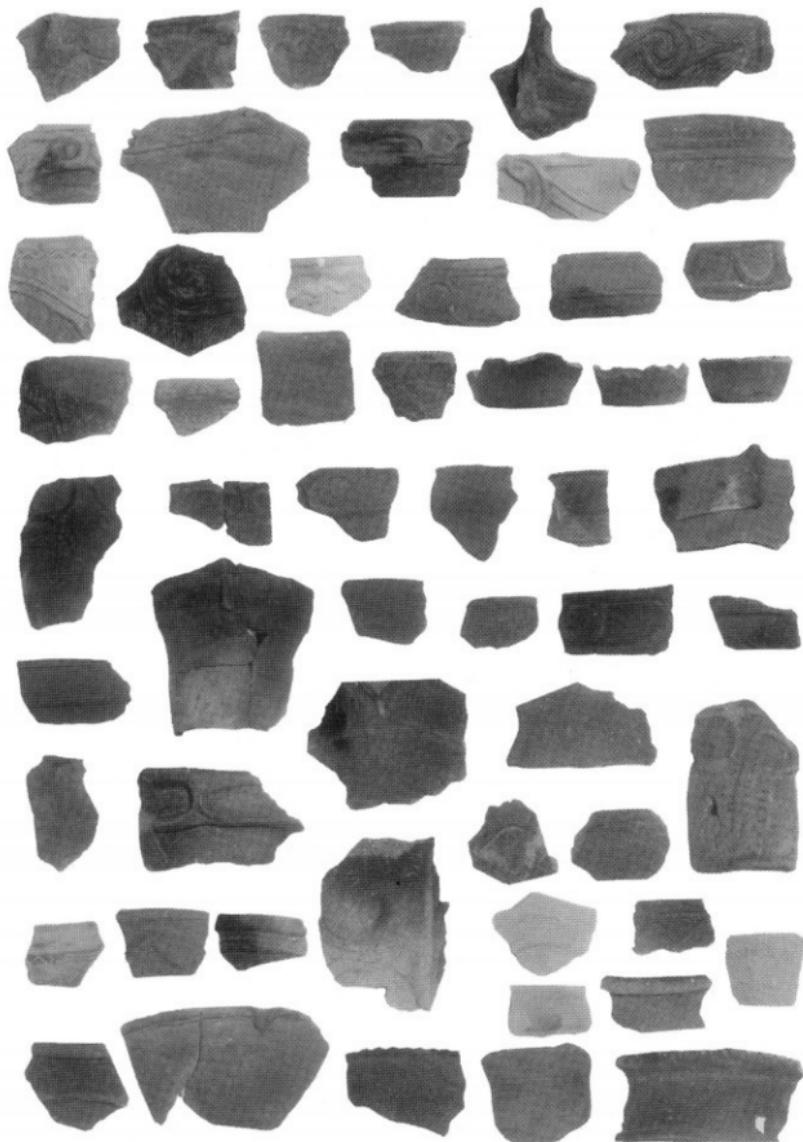
P L 6 1区・2区出土土器



P L 7 2区出土土器



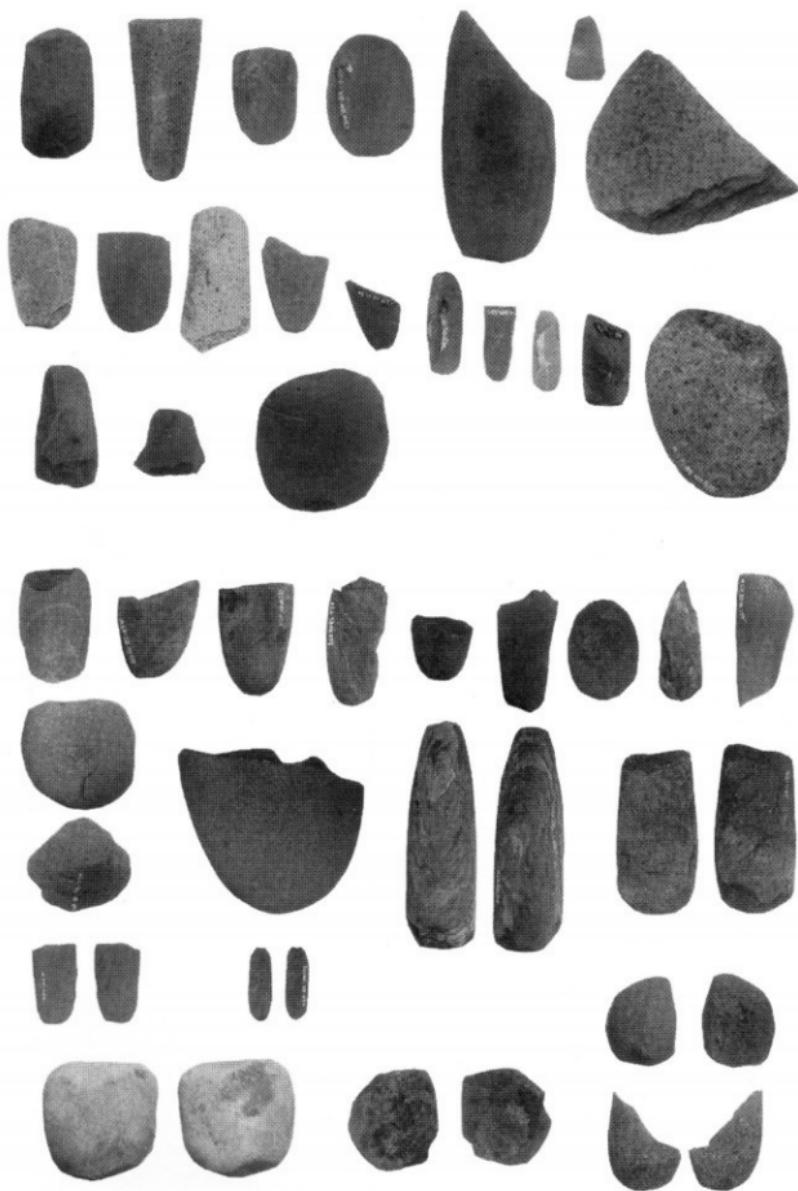
P L 8 2区出土土器



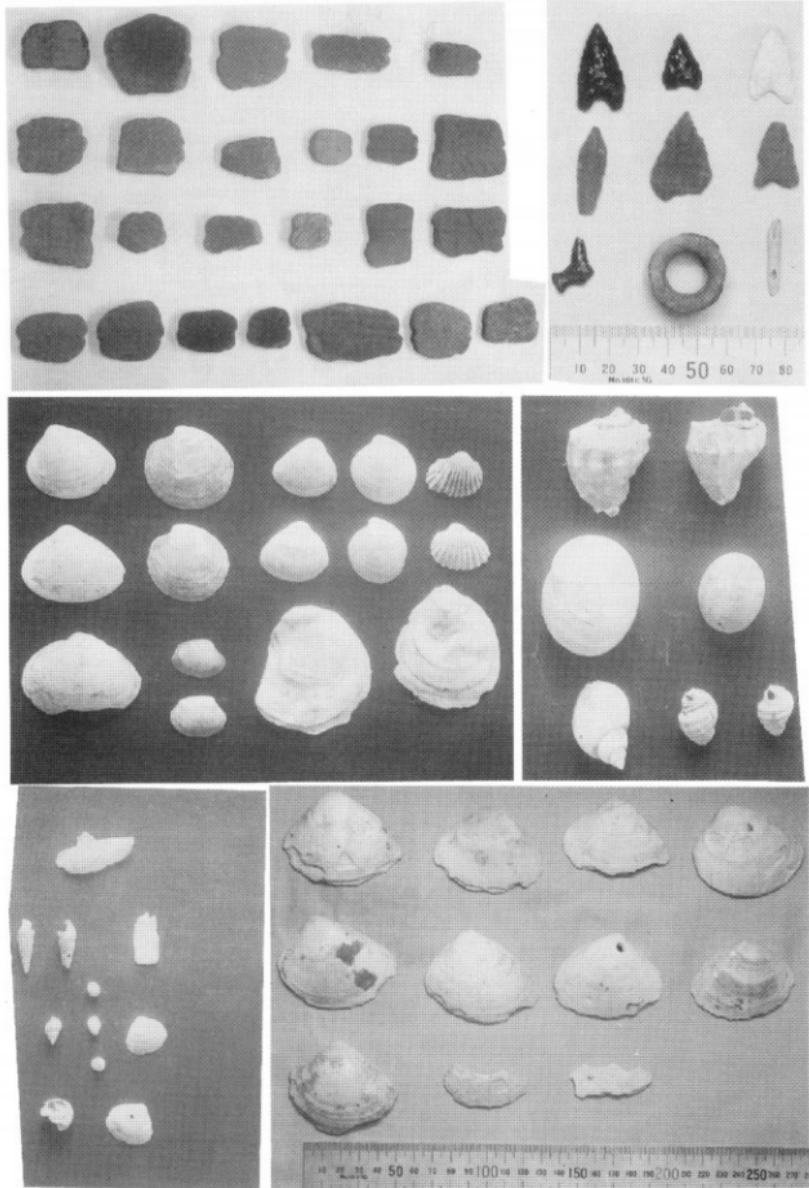
P L 9 2区・3区出土土器



PL 10 3区・4区と前期中期出土土器



P L 11 各区出土石器



P L 12 各区出土土器片錘・石鎌・貝・貝刃

茨城県行方市
杉平貝塚
発掘調査報告書

2007年12月

編集 鹿行文化研究所
汀安衛
鹿嶋市青塚718-1
発行 行方市教育委員会
行方市遺跡調査会
印刷 (株)さんゆう社 印刷
行方市玉造甲2641-6